
バカとテストと召喚獣 ~蒼い瞳の従姉~

G A U

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 ～蒼い瞳の従姉～

【NZコード】

N7557X

【作者名】

GAU

【あらすじ】

明久と同じ日同じ時間同じ病院で生まれたイタリア人ハーフの少女、夏目綾香は、その自由奔放且つ傍若無人人な性格で彼を振り回す！

双子同然に育つた彼と彼女のドタバタコメディー
この作品はバカとテストと召喚獣一次創作です

♪ルルルーブ（前書き）

気が付いたら書いてました。
読んでくれる方が楽しんでくれたら幸いです

ふるるーぐ

とある家族向けマンションの一室。

春の陽気にはてられ、その少年は惰眠をむさぼる。

しかし、ベッドの上の盛り上がりは、一人分にしては大きい。

「んん……」

窓から差し込む日差しに、少年が寝返りを打つ。

その鼻腔を、柔らかい匂いがついた。

「ん？　んんん？」

眉根を寄せた少年が身じろぎしようとすると、全身が柔らかい何かで締め付けられる。

「んん？　な、なに……」

軽く寝ぼけたまま眼を開いていくと、視界いっぱいに金色が広がる。

ほんやつしながら“それ”へと手を伸ばし、軽く撫でる。

柔らかい金色の手触りは気持ちよく、なんとはなしに撫で続ける。

「ん、ううん……」

不意に気持ち良さげな声が聞こえた。つづけて体にまとわりついた柔らかいものがもどかしそうにうごめく。

そして、金糸の向こうに白い肌が見え、閉じられた眼の長いまつげが揺れた。

「…………」

その“顔”を見た瞬間、少年吉井明久の霞がかかった頭がクリア一になつていく。

すると、自分のみぞおちのあたりににいつの柔らかい膨らみを感じとり、意識は一気に覚醒した。

「…………！」

状況を瞬時に把握したところで、金糸の向こうの瞼が開き、蒼い

瞳が表れる。

「…………」

数瞬、見つめ合つ二人。そして、蒼い瞳の少女が天使のよう、ふんわりと笑つた。

「おはよ アツキー」

その笑顔に朱を散らす明久。

それを見た瞬間、天使の微笑みが、悪魔の笑いに変化した。

「なーに？ アツキー。おねーさんに欲情した？」

「…………おねーさんもなにも同じ年だよね綾香と僕は」

少女、夏目綾香の嫌らしい笑みを見てゲンナリとなる明久。

「そもそも何で綾香が僕のベッドに……」

「あー、抱き枕 明久 が気持ちよさげだったから、つい

「なんだか別のもののルビに僕の名前が使われた気がするんだけど？」

悪びれることもなくのたまう綾香に、明久がジト目になる。

「またまたそんなこと言つて、おねーさんのおっぱいの感触楽しんでるくせに」

「…………否定はしない」

吉井明久と夏目綾香は従姉同士だ。

同じ日同じ病院で同じ時間に生まれた二人は、双子の「」とく時間を共有して育つた。

ゆえにお互いのことはたいてい解つてしまつ。

下手に誤魔化そつものなら、綾香はアダルト「一ドギリギリのボディタッチを駆使して明久に吐かせようと/or>。

そして、このイタリア人ハーフの娘は、明久の反応を見て喜ぶのだ。

故に、素直に吐いた方が実害はない。

「ちえー、つまんねーの一」

言いながら身を起こし、ベッドから降りる綾香。

そのまま軽く伸びをしてからあぐびを一つ。
その様子を見て嘆息した明久は身を起こし、ハツとして綾香の姿を見た。

いまの綾香は、私立文月学園女子の制服に身を包み、肩をグリグリ回している。たわわに実つたソレのおかげで肩こりがヒドいといふ話を聞いた気がしたが、今はそんなことはどうでもよかつた。急いで首を巡らし時計を見やる。

「……」

「ん？ アツキー、どしたん？」

時計の短針長針の行方に啞然呆然となる明久。

その様子に綾香が首を傾げる。

「ち……」

「ち？」

「ちこくだーつ！？」

「あ、ほんとだ」

焦った様子の明久にのんびり同意する綾香だった。

ふるわーぐ（後書き）

いかがでしたか？

まあ、続きを書くかは反響次第かな？

突発ネタですし。

それでは失礼します

綾香のふわふいーる

なつめあやか
夏田綾香

身長：170cm

体重：ないしょ

B92
W63
H93

明久と同じ日の同じ時間同じ病院で生まれた、イタリア人ハーフの従姉。

明久の実家と綾香の実家は数百メートルほどしか離れておらず、互いの家を遊び場として時間を共有しながら育つた。

ほとんど双子同然に育つたことから、家族同然の気安さがあり、明久とはアイコンタクトすら不要なくらい互いの考えが読める。

小さい頃から活発で、明久とともに男の子に混じつて泥だらけで転がり回るよう遊ぶ子供だった。

だからといって女の子と合わない訳ではなく、明るく元氣で男女ともに友人が多いタイプ。

そのため勘違いされることが多く、小学校の時分から告白されることが多いかったらしい。

そのすべてを断り、現在に至る。

外見は金髪碧眼で、顔立ちはどちらかといえば日本人のもので、瞳の蒼さが際だつような大きな目をしており、肌もきめの細かい白い肌をしている。

もつとも活発な代償として、生傷が割とあつたりするが。

長く伸ばした金髪はハーフとは思えないほど美しいが、くせつ毛がひどく、手入れを面倒がる。

服装も、制服以外にスカートは持っていないくらいで、活動的な格好を好む。

美人というほどではないものの、いつも笑顔でいるため、不思議な魅力があり、人を惹き付ける少女だ。

明久とは距離感が近すぎるほど近く、前述したように双子と言つても過言ではない関係。その分互いを異性として認識していない節もあり、仲の良い姉弟のようでもある。

さすがに頻度は減つたが、同じ布団に一人で寝たり、綾香が明久に髪を梳いて貰つたりなどがまだに行われている。

また、中学に上がつたくらいまで一緒にお風呂に入つた経験まである。

性格は明るく快活で、運動神経も抜群に良く、父親のサバイバル訓練の趣味に付き合わされた結果、同年代のアスリート並の体力と運動能力を誇るが、趣味の大半はインドア系。

楽しいことやお祭り騒ぎ、とくにイタズラを仕掛けることが好きで、仲の良い同性や明久にはセクハラまがいのイタズラを仕掛けることも多々ある。

しかしながら、心理的に男性との線引きは意外なほど厳しく、ボディタッチなどは無意識に避けてしまうようだ。その割には、女性としては無防備すぎるところがあるため、誤解を招くことが多々

ある。

このようにアンバランスな彼女ではあるが、それらがうまくかみ合った不思議な魅力を醸し出しているのも確かだ。

特に勉強しているわけではないが、学力は割と高く、学年で五十位前後。つまりAクラスとBクラスの狭間くらいの成績。本人曰く「授業を聞いてキチンと理解して、予習復習を忘れなければこの位は普通」らしい。

総合科目は2161点で、調子が良ければ2500点を超えることもある。

得意科目は数学と物理で、パズル感覚で黙々と数式を解いていくのを好む。

特に集中しているときの解答速度は群を抜いており、調子の良いときは、どちらも500点前後とれる。

他の科目はだいたい150点ほどをコンスタントにとっている、苦手科目はない。

綾香の召喚獣は、ディフォルメされた綾香の姿で、文月学園の冬の制服に、金細工の施された黒いガントレットとレガース、そして腰に下げた一本の柳葉刀を武器とする。

敵の攻撃は、ガントレットとレガースで受け止めたり弾いたり、受け流すスタイル。

武器の柳葉刀とは、先端の方が大きく分厚い中華刀で、その大きな剣先の生み出す遠心力で切断力を増す武器。これの二刀流で戦う。

また、柄頭から紐が伸び、先端が柳葉刀の鞭のように使える。この紐の長さも相当長いため、二本同時に振り回せば、召喚フィールド内のほとんどをカバーできる。

特殊能力は、『ミラージュステップ』。使用ごとに分身が一体生

み出され、本体の行動を追従する。この分身による攻撃も通常の攻撃と同じ扱いになる。

一体生成することに、10点を消費する。

分身は、フィールドを出るか、攻撃を受けるかしない限り消えることはない。

だい こかわん（前書き）

なにやら思つていたよりずいぶんと反響がありましたので、続きを書いてみましたよ？

読んでくださるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです

だい いちもん

校舎へと続く坂道。

両脇を桜で彩られたその道に、鮮やかな金色が踊る。

「疲れた～、アツキーおんぶ～」

「もう、しつかり走つてよ綾香」

少しネジの緩そうな少年に手を引かれ、金髪の少女がぶーたれる。「だいたいバイク通学ダメなのが問題なんだよ～。一ヶツすれば遅刻なんてしなかつたのに～」

ぶつぶつ文句を言いながらも手を引く少年にならつて走る。

おかげで癖つ毛の長くて柔らかそうな金髪と、文月学園指定のブレザーを内側から盛り上げるふくらみと、腰回りを覆うスカートが上下に揺れていた。

「どつちこしたつて僕を抱き枕にして寝ちゃった時点でアウトだつたと思つよ」

苦笑いする少年、吉井明久につながされ、仕方無しに足を早める少女、夏目綾香。

唇をとんがらかせながら明久の後頭部をにらみつける。

「むー、アツキーのくせに生意氣な……とうつ

つと楽しげなかけ声が響いて明久の背中に衝撃が走り、少女の柔らかい体がぶつかってきた。

「わわっ？！」

思わず衝撃に驚いて声を上げるも彼女の体をしつかと支えてみせる明久。彼の背中に笑顔でおぶさつた綾香は身を起こして「満悦だ。
「らつくち～ん いつけー明久号～」

元気良く右手を突き出した彼女に対し、深々とため息を付いた明久は、彼女を支え直してから軽く走り出した。

どちらかといえば細身な明久だが、その体はきつちり鍛え上げら

れていった。

幼い頃から綾香と一緒に、サバイバル訓練が趣味だといつ彼女の父親の訓練に付き合わされた結果だ。

綾香はそんな明久の首に手を回し、彼の背中に体を預ける。

彼が坂道を上りきるまでの、わずかな間、綾香は桜を楽しむ。

明久が、足取りも息づかいも乱れぬまま坂を上りきると、そこには浅黒い肌の巖の「とき漢が仁王立ちしていた。

「遅刻だ。吉井に夏田」

「あ、鉄じ……じゃなくて、西村先生。お早うござります」

「あー……てつちゃんだー……おっはよーん」「

明久は軽く会釈し、綾香は明久におぶさつたまま身体を田一杯伸ばしながら右手を大きく振つた。

その様子にため息をつく西村教諭。

「はあ、おまえ達は……普通に『お早うござります』じゃないだろう。それから夏田。おまえは教師に対してフレンドリー過ぎだ」

「はあ、じゃあ……今日も肌が黒いですね？」

「だねー……今日もいい感じに暑苦しいぞ」

明久が首を傾げながら言う真上で、綾香が片手をつむつてペロリと舌を出しながらサムズアップする。

「お前ら……遅刻の謝罪より俺の肌の色や暑苦しさ……の方が重要なのか？」

「あ！ そっちでしたか。すいません」

「あたし的には重要かな～？」

謝る明久に、楽しげな綾香を見て嘆息する西村教諭。

「とにかく受け取れ」

そう言つて差し出してきたのは一枚の封筒。

それを綾香が受け取り、明久の背から飛び降りると、自分のものと一緒に彼宛の封筒もさつさと破り開ける。

「つて？！ ちょー？ まー！」

流れのような彼女の行動に、焦る明久。

「アツキーのクラスはっと……くえ……ほお……ふう〜ん」

明久に見せないように中身を見てにんまり笑う綾香。

「ちょっと返してよ！」

「や〜だよ〜ん」

明久は自分のクラスが書かれた紙を綾香から取り返そうと掴みかかるが、彼女は楽しそうに逃げ回る。

それが少し続いたところで……。

重いものが石に落とされたような重量感あふれる音がふたつ響く。西村教諭の拳が二人の頭を痛打した音だ。

「まったくいい加減にせんか。とつとと自分の教室に行け」

呆れたような声を出す西村。その足下で頭を押さえてうずくまる二人。

そして、綾香が痛みのあまり取り落とした紙には……。

『吉井明久……Fクラス』
『夏目綾香……Fクラス』

ふたりの学園最低クラスでの生活が始まった。

だい こひもん（後書き）

いかがでしたか？
普段書いてる分量より短い感じですが、テンポ良く行きたいなと思つておつけます

だい にもん? (前書き)

さて、『だい にもん?』更新となります
読んでくださる方に楽しんでいただければ幸いです

だい にもん？

「おー でつかい教室だー 」

「……うん。ばかデカい教室だね」

去年は足を踏み入れなかつた三階。

そこで田の当たりにしたのは巨大な教室だ。

「おー すっげーぞアツキー！ 個人エアコンや冷蔵庫までついてる！」

「なんかもう高級ホテルだね……」

田をキラキラさせてる綾香に対し、明久はちょっと引いてる感じだ。

「あ！ 優子だ おーい ゆーこー 」

豪華な教室の廊下側の窓から中を覗いていた綾香は知り合いを見つけた喜びに、体をいっぱいに伸ばして両手を振る。

それに気づいた眼鏡にボブカットの少女は不思議そうな顔になり、ボーアイッシュショートヘアの縁髪の少女は面白そうな表情となる。そして綾香の目当ての少女は、彼女を一瞥して、無視した。

「あつれー？ 気づかないのかなー？」

田当ての少女の様子に綾香は首を傾げる。

「……なんか注目されてるね綾香」

「ん？ 別にいーじゃん？ はあ。じゃ、教室行こうか」

言つが早いか明久の手を取り歩き始める。

そんな二人を鋭く見つめる一対の視線に気づかずに。

三階、旧校舎部。明久と綾香は連れだつてその古ぼけた……いや
さ廃屋のような教室の前に立つた。

「すっごー。きっとこの教室崩れるぞ？ アツキー」

先ほど同様、田を輝かせる綾香。対して明久は顔をひきつらせるばかりだ。

「ま、まあ中はマシかもしないしね
おのれに言い聞かせるようにつぶやく明久。

「なあなあアツキー　どんな奴がいるんだろうな　」

言いながら綾香は明久を引っ張りながら戸を開けた。
「早く座れウジ虫野……ぼぐればぐらしゃつ？！」

開口一番罵倒を口にした赤い髪をツンツンに立てた少年の顔面に、
きれいに揃えられた白い両足が突き刺さり、吹き飛ばされる。
綾香がショートダッシュからひねりを加えたドロップキックを決

めたのだ。

ちなみにスカートを太股で挟んでめくれないようにしているが、
瞬時にベストポジションを確保した小柄な少年がシャッターを切つ
ていた。

が。

着地した綾香がにんまり笑う。

「…………ま、まさか？！」

「そうだよ？ 康太。あたしはちゃんとスパッツ履いてるから　」
ぴらりとスカートをめくつて見せる綾香に鼻血を噴出する小柄な

少年。

「…………くつ。スパッツを履いていながらもあたかも履いていな
いようにガードして見せるとは……不覚……」

そのまま力尽くる、康太と呼ばれた少年。

一方、明久は綾香の口ケツトキツクを食らった赤毛の少年のところへ近づくと、足先で彼をついた。

「おーい、雄二？ 生きてるか？」

「ぐ……あ、明久か……いつたい何が……」

頭を振りながら身を起こした、雄二と呼ばれる少年。

その顔面には、しつかりと綾香の上靴の底の模様が刻まれている。

「綾香の全力ロケットキックを食らつたんだよ。あれ、地味にひねりまで加えてるから威力あるんだよね」

「……綾香？ アイツはBクラスかAクラスだろ？ なんでFにいるんだ？」

頭がはつきりしてきた雄一は、クラスに思いもしない人間がいたことに驚く。

「あー、うん。綾香、途中退席したからね。点数が無いんだよ」「雄一の質問に顔をしかめながら答える明久。

「あー面白かった あれ？ 雄一じゃん。どつたの」

向こうで康太をイジって遊んでいた綾香がやってきてそうのたまう。

「てめえに蹴り飛ばされたんだよ！ このエセ外人！」

「あー。さつきの雄一だつたんだ。ウジ虫呼ばわりされたから反射的に蹴つたんだけど、雄一ならいつか」

花が咲くように笑う綾香。そのまま明久の腕をとつて歩き出す。

「アツキー、こっちで一緒に座ろうぜ〜」

周囲から明久に向けられる殺氣と嫉妬の視線を気にもせずに、明久と腕を組むようにしながら教室の後ろの方へ引っ張っていく。畠敷きにちやぶ台という、本来教室としてあり得ない環境も気にしない綾香。

果たして彼女はこのおんぼろ教室で、どんな騒動を引き起こすのか？

だい にもん？（後書き）

いかがでしたか？

基本自由な綾香の活躍は、まだまだこれからですよ

だいさんもんー(前書き)

だいさんもん！ 更新しました
よろしくお願いします

だいさんもん！

周りの田を気にすることなく空いてるちやぶ台へ向かつた綾香と明久。

「おー　ここにしょーザー　」

隅の空いてる席を発見した綾香が楽しそうにそちらへ向かう。そして苦笑い気味にその後を着いていく明久。

着席しながら手招きする綾香。

「アツキーは、あたしの後ろな

言われて明久はうなずき、綾香の後ろの席に着く。
するとちょうど担任とおぼしき中年男性が教室に入ってきた。
未だダメージの抜けきらない雄一と康太に対して席に着くよう促すと、自己紹介を始めた。

「つー、まだ頭がくらくらするぜ……」

ぶつぶつ言いながら明久から一つ席を挟んだ向こうに座る雄一。
その目は綾香をにらんでいるが、彼女は気にならない。

と、明久の眼前に金髪が広がった。綾香が頭を背中に向けてそらすように明久の方へ顔を向けたからだ。

「なあなあアツキー。なんで黒板に名前書くのやめたんだろうな？」
綾香に言われて前を見ると、福原慎と自己紹介した中年男性が黒板の方から生徒の方へ向き直つたところだった。

「あー、さつき見たんだが、チョークのクズしか無かつたからな」
つまらなさそうに答える雄一。それを聞いて綾香は目を丸くした。

「すげーな！　……たはあ～」

無理な姿勢で耐えていた彼女だったが、力尽きて明久のちやぶ台に背中をつけた。

ちなみに先ほどから自己主張の激しい双子山が際立つていて、男子の視線がそこへ集束しており、康太がシャッターを切っていた。

「それでは、順番に自己紹介してもらいましょう」

福原教諭の声に、綾香はパツと身を起こした。

目をキラキラと輝かせて聞く体勢だ。

そして、ひとり立ち上がった。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

独特の言葉遣いに小柄な体。美少女と見間違つばかりの愛らしい容姿の少年、木下秀吉。

明久の去年のクラスメイトだ。

「おー 秀吉じゃん 相変わらずかわいーよなー」

そう綾香が口にすると、秀吉が綾香の視線に気づき、一瞬、複雑そうな表情になつたがすぐに座つてしまつた。

そして再開される自己紹介。

「……………土屋康太」

康太が立ち上がって名乗ると、綾香が“あの”悪魔の笑みを浮かべた。

康太が座ろうとしたところで綾香がおつきな声を出す。

「いよ ムツツリスケベ」

「……………そんな事実はない（ブンブンブン）」

顔と手を左右に振つて否定する康太。

クラス中に注目されながら否定を続ける彼を見て、綾香は大笑いする。

その騒ぎが終息し、再開された自己紹介。

「島田美波です。海外育ちで、日本語の会話は出来るけど、読み書きは苦手です。あ、でも英語も苦手です。ドイツで育つたので。趣味は……」

そして今自己紹介をしている赤茶色の髪をポニーテールにした少女を見て、またもや綾香が笑う。

「まあた美波と同じクラスじゃんアッキー 嬉しいんじゃない?」

「そりや友達だしね…………。けど彼女。段々と技の切れ味が上がつてきてるから、避けるの大変なんだよね…………」

すこしげんなりしながら答える明久。

「はろはろ～」

手を振る美波に、綾香も笑いながら手を振り返していた。

「やつは～ 美波～」

さらに自己紹介は続いて、綾香が立ち上がった。

「夏目綾香だよ よろしくね 好きなものはプリン 嫌いなものはしつこい人。身長は170。体重はないしょ スリーサイズは上からバスト92、ウエスト63、ヒップ93だよ ちなみに戦闘とかメンドいから彼氏の募集はしてないよん」
その言葉に、Fクラス男子の大半が絶望した。

だいさんもん！（後書き）

だいさんもん！いかがでしたか？

綾香の恋愛メンドい発言に、全Fクラス男子が泣いた！

次回は綾香が何を始めるんでしょう？

だい よんもん

綾香がFクラス男子を絶壁の「すんざー」に追いやったのを後日に、明久が立ち上がる。

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さい……」

シンツ……。

誰も明久の自己紹介など聞いていなかつた。

「ノ……ノーリアクションって、地味にダメージデカいよね……」
さめざめと涙を流しながら着席する明久。

すると綾香が楽しそうに振り向いて、明久のちゃぶ台に、笑顔で頬杖を着く。

「気にすんな ダーリン」

「……やっぱ痛々しいからその呼び方やめて……」

明久の涙が加速するのを見て、綾香はさらに楽しげになつた。そして膨らむ殺意と嫉妬。「……気のせいいか僕へのプレッシャーが凄いことになつてる気がするんですけど……っ？！」

「？ そうかあ？」

あまりの圧力に滝のような汗を流す明久。それを受けて綾香が周りを見回すと、プレッシャーが霧散する。

「なんともないじゃんよ」

言いながら明久に笑顔を向ける綾香。
と、そのとき。

教室の戸が開いて、一人の少女が息を切らせながら入ってきた。

「あの、遅れて、すいません……」

『え?』

その少女の姿に、教室中が呆気にとられた。
そして綾香も驚いた顔で立ち上がった。

「み、瑞希?！」

「え? あ、綾香ちゃんですか?!! な、なんで綾香ちゃんがつ
つ!？」

「それはこっちの台詞だよ~」

そう言いながら立ち上ると、瑞希の方へ行つて彼女を抱きしめ
る綾香。

「わたしは振り分け試験中に熱を出しちゃって……。それで綾香ち
ゃんは?」

綾香に抱きつかれながらふわふわのピンクブロンドの少女、姫路
瑞希は苦笑い気味に答えてから綾香に訊ねる。

綾香は瑞希の言葉を聞いて、大変だったねとつぶやくように言つ
てから、相好を崩した。

「あたしは、祖父ちゃんが倒れたつて連絡が来てさ、途中退席した
んだよ。まあ、実は祖父ちゃんのイタズラだったんだけどね」

その後、祖母ちゃんとパパ達に怒られてたよーなどと笑いながら
話す綾香。

「けど、今年はアッキーも瑞希も同じクラスだなんて、あたし嬉し
いよ~」

「え? 明久君も居るんですか?」

綾香の言葉に、瑞希が顔をほこりぱせた。

あつちだよ。と、綾香が指さした方を見て花が咲き乱れるかと思
うほどの笑顔を浮かべる瑞希。

これによつて明久への殺意と嫉妬はうなぎ登りに上がつていいく。

そんな空氣など読まぬとばかりに中年男性の弱々しい声が通つた。

「え?、嬉しいのはわかりましたが、席について下さい夏田さん。

それから姫路さんは自己紹介を

言われて綾香は目をぱちくりさせる。

それから腰を折つて頭を下げる。

「あーゴメンね？ 福ちゃん。席戻るから怒んないでね？」

そう言つてから席へと戻つていく綾香。

そして、残つた瑞希が軽く会釈した。

「姫路瑞希です。一年間、よろしくお願ひしますね？」

そう言つて顔を上げると、少し頬を紅潮させながら小走りで教室の後ろの方へ向かった。

「ふう、緊張しました」

ほう。と息をついて、明久と雄一の間の席へと着席する瑞希。それを待ちかまえていたように綾香が瑞希の方へ体を向けた。「けど、瑞希と同じクラスになるのって小学校以来だよね～」

そう綾香が話すと、瑞希も笑顔で応じる。

「そうですね。中学は違つところでしたし」

「去年なんか、アツキーともクラス違つちゃったしさ。小中で違うクラスになつたこと無かつたのに……」

そう言つてちょっとだけしんなりとなる綾香。

するとその時のことと思い出したのか、明久が苦笑いを浮かべた。「あの後ひどかっただつけ。『何で違うクラスなんだーー』って怒鳴られたんだよ？ 僕のせいじゃないのに」

やれやれと肩をすくめる明久に、綾香はバツが悪そうになる。

「う。い、いいじゃんさーその事は！」

「クスクス、私の所にも相談しにきたくらいですしね

「み、瑞希つ？！ バラすなんて裏切り者おつ！…」などと騒ぎになり始める。

すると当然。

「はい、そこの人達。静かにして下さい」

と、教卓を軽くたたきながら注意する福原教諭。

それに対しても明久達が謝ろうとした瞬間。

パキイ、ガラガラガラ……。

そんな音を立てて、教卓が廃材の山になつた。

だい じもんかな？

福原教諭が廃材となつた教卓の換えを取りに行つてゐる間、明久は雄一を誘つて廊下に出でていた。

「戦争だと？」

「そう、試験召喚戦争」

訝しげに聞き返す雄一に対して、明久はしつかりうなづいてみせる。

「……おい明久、てめえなにを企んでやがる？」

「別に企んでなんていないよ。あんまりにも教室が酷いからね」探るような雄一に対し、軽く肩をすくめる明久。

その様子を見ていた雄一の目が細く鋭くなる。

「……姫路と夏目だな？」

「！？」

雄一の指摘に、体が震える明久。

「……やつぱり、わかるかな？」

「カマかけただけだつての」

「うぐ」

「まあ、いいだろ。Aクラスとの勝負に勝つ策もなんとかなりそうだしな。と、戻ってきたみたいだ。中へ入るぞ」

雄一に言われて明久はうなずきながら教室に入つていった。

福原教諭が戻つてきてから再開される自己紹介ではあつたが、淡々と進むそれに飽きた綾香は、明久のちやぶ台に寝そべり、組んだ両手に顎を乗せながらあくびをかみ殺していた。

綾香の頭は明久の顔の下あたりにあり、彼のちやぶ台は美しい金糸のテーブルクロスが敷かれているようだつた。

「つまんねーなー？ アッキー。そつから紐無しバンジーしてきなよ～ 笑つたげるから～」

頭を横に倒し、横目で明久を見上げながら小悪魔の笑みを浮かべる綾香。

その突拍子もない提案に、明久はため息をつく。

「笑つたげるから じゃないでしょ？ ここは二階だからね？ 紐無しバンジーなんしたら怪我しちゃうからね？」

「ちえー、つまんなーい」

唇をとんがらかせ、頬を膨らませながらふーたれる綾香。白い足がパタパタと動き、赤いスカートと黒いスパッツに包まれた丸いヒップが揺れる。

この綾香の体勢に、明久への殺意と嫉妬を向けたいFクラス男子であつたが、そんなことより、無防備な綾香をガン見したいという欲望がせめぎ合つてゐるようだつた。

そして血涙を流しているのは綾香と同じ列に座る男子諸君。

真後ろを向かなければその絶景を見ることができない為、激しい葛藤に身を焦がしていた。

「さて、グダグダではありますが、自己紹介最後の一人は君ですね？」
坂本君

誰も聞いていない自己紹介はいつの間にやら終盤だつたようだ。福原教諭に言われた雄二が、うーっす。と、答えながら立ち上がり、教壇へと向かう。

その様子になにか感じるものでもあつたのか、綾香も身を起こして座り直した。

雄二が教壇まで来ると、福原教諭が声をかけながら教卓を譲つた。
「坂本君は、Fクラスのクラス代表でしたね」

「はい」

返事をしながら教卓に手を着きながら立つた。

「俺がFクラスの代表、坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

そう言って少し間を置く。

自然、クラス中の視線と意識が雄二に集中した。

それを確認した雄一はおもむろに口を開いた。

「さて、ここでひとつ、みなに問いたいことがある」

そう言って言葉を切り、教室を見回す。

その視線の先を追つてしまつ一同。

古ぼけてガタガタなちゃぶ台。

つぎはぎだらけで、綿の代わりにホコリが詰まつて、そつた座布団。

隙間だらけの壁と、割れたガラスしかはまつていらない窓。

それらを見てから、皆に向き直る雄一。

「……Aクラスは、システムデスクにリクライニングシートらしい
が……不満はないか？」

『大アリじやああああつつ……』

クラスの男子が一斉に唱和した。

そしてそこかしこから、不平不満の声が、止めどなくあふれてくる。

「そうだろう？ 僕も代表として問題だと思っている。そこでだ」

雄一の雰囲気が、カミソリのごとく鋭くなつた。

「我々Fクラスは、Aクラスに対し、試験召喚戦争を挑もうと思つ
引かれた引き金。

そして、その言葉に、綾香の目が になつた。

だい ろづくもん

『勝てるわけがない！』

雄一の引いた引き金に対する第一声。そしてこれこそが、クラスの総意を代弁していた。

試験召喚戦争とは、文月学園独自のシステム、“試験召喚システム”を利用し、テストの点数に応じた強さの召喚獣を召喚し戦わせて行う疑似戦争だ。

これに勝てば、相手の教室設備を奪うことが出来るのだ。

しかし、文月学園は、第一学年からは成績順にクラス分けがなされる。最底辺のFクラスと最高位のAクラスでは、三倍以上の点差があり、それがそのままクラスの戦力差につながるのだ。

いくら最底辺のクラスとはいえ、その位のこともわからないような人間はおらず、さらにあちらこちらから開戦に対する否定的な意見が飛び出しだ始めた。

その中にあってなお、明久は真剣な眼差しで、綾香は楽しげな顔で、雄一を見つめていた。

そして、クラス中が騒ぐ中、それを貫く声が響いた。

『いや、勝てる！！俺が勝たせてみせる』

力強い言葉。

それを発したのは雄一だ。

呑まれるように、クラスが静かになる。

「だが、そうは言つてもにわかには信じられないだろう。そこで、このクラスに存在する勝てる要素を説明しようと思つ」

雄一の言葉に、クラス中が顔を見合させ、ざわつく。

しかし、彼は意にも介さずに口を開いた。

「まずは康太。姫路のスカートを覗いていいで前に来い」

その雄一の言葉に、瑞希が、え？ となり、畳に顔をつけていた康太があわてて起きあがる。

「…………！？（ブンブンブン）」

「ひやわつ？！」

赤くなり、太股を閉めながらスカートを押さえる瑞希。その様子に綾香は楽しそうに笑う。

「あつはつはつは 康太のムツツリスケベ～」

「…………そんな事実はない」

はつきり否定する康太。その視線が、綾香の視線と絡み合ひ……ことも無く、彼女のわがままな双子山に注がれていく。ふいに、綾香が口を開いた。

「…………何色だつた？」

「…………水色」

「やつぱ見てんじやん」

「…………巧妙な誘導尋問」

「ひどいです綾香ちゃん！ 何で私のパンツの色を公開しちゃうんですか？！」

パンツの色を暴露されて目をぐるぐるにしながら憤る瑞希。

「ぱんつくらい良いじやん 特に何も減らないし」

「減ります！ 何かこいつ、大切なものが減っちゃうんです！」

バラしたのは綾香ではないが、瑞希は混乱していく気づかない。一方の綾香も気にした風でもなく瑞希に応じている。

「あー。話づけたいんだが……」

不意に雄一から声をかけられ、瑞希はハツとなり、顔の紅の面積と色合いを増加させながらペコペコ謝った。

「…………ま、いい。少し脱線したがこいつは土屋康太。まあ、この名前ではあまり知られてないだろ？が、こいつの正体はあの“有名な寡黙なる性識者”だ」
（ムツツリスケベー）

「雄一のその紹介に、教室が騒然となる。集まる視線は恐怖と畏敬。さらには綾香が合いの手まで入れて教室は大盛り上がりだ。

しかし当の康太はそれどころではない。

「…………！」（ブンブン）

「こんな状況にあってなお否定する康太。その姿は哀れを誘う。

「はあ、煽るな夏目。次は姫路。今更説明する必要はないだろうが、その力はみんなも知つての通りだ」「わ、私ですか？」

「うちの主戦力だ。期待させて貰う」

言われて瑞希は神妙な顔つきで、ハイ。と返事をする。

「それから島田美波」

「ウチ？」

突然話を振られて驚く美波。

「こいつは自己紹介にあつたように帰国子女で、数学ならBクラスレベルだ」

その雄一の言葉に、どよめきが生まれる。

「ちょ、ちょっと坂本！ ウチはそんな戦力には……」

美波は持ち上げられて、若干焦り氣味に否定しようとするものの。

「木下秀吉だつて居る」

「雄一はスルー。」

「ワシかの？」

名前を呼ばれると思つていなかつた秀吉は、きょとんとなる。だが、教室は秀吉の名前が挙がつたことにせらりなる盛り上がりを見せる。

「そして夏目綾香」

「いえーっす」

続けて拳がつた自分の名前に、綾香は立ち上がりながら応え、スキップするように前へ出ると、そのまま教卓に飛び乗つた。

「お、おーーー？」

これには雄一も驚いてやめさせようとするが、綾香は気にしない。「綾香だよ～ みんな、勝つぞーーー」

さう大きな声で宣言し、大きく両手を振り回しながら軽く飛び跳ねる。

するとFクラスの士氣は最高潮を迎えた。

『ウオオオオーーッッ！！』

そんな雄叫びが響き、教室が揺れる。

そして綾香の足が、再び教卓に着いた瞬間。

バキバキバキイツ！！

「へ？」

「な？ ぐおつ？！」

崩壊する教卓に雄一を巻き込みながら教壇へと落ちる綾香。埃が煙のように舞い上がり、一人の姿を覆い隠す。

「綾香つ！？」

「綾香ちゃんつ！？」

明久や瑞希をはじめとしたクラスメイトたちが、あわてて教壇に集まつた。

次第に晴れたそこには、元教卓の廃材の山。そして、クラス代表の少年の顔の上にぺたんと女の子座りした綾香の姿があった。

だい ななもんだッゼ！

「うへえ…… ペッペッ、ホコつまみれだよ～」

頭からホコリを被つてしまつた綾香は、それを払つ。

「もがあ～！～」

「きやんつ？！」

すると突然尻の下から声が響き、その刺激に驚く綾香。

「もめえつ！～ めあくおえつ！～（重えつ！～ 早く退けつ！～）

「ひやあんつ？！」

立て続けに刺激を受けて少し艶っぽい悲鳴を上げながら飛び退く

綾香。

「くつね、ひでえ田にあった……」

綾香の尻の下から現れたのは、赤毛の少年の顔。

ホコリと廃材まみれのまま身を起こした彼は、周囲の空氣の変化に気づかない。

「……おい、夏田！ ふざけるのもいい加減に……？」

激高した様子で綾香に怒鳴り始めた雄一は、そこで初めて教室の空氣がドス黒いことに気づいた。

よく見れば明久の背後に隠れるよつとしている綾香は珍しく涙目で、瑞希に慰められている。

「お、おい？ なんだお前ら？ 何殺氣立つてんのだ？ 僕はどつちかと言えば被害者……」

焦りを滲ませ弁解する雄一。

その時、綾香が口を開いた。

「ぐす……。アツキー、雄一にえらい事されたー」

その一言で、クラスの男子が臨界点を迎えた。

『坂本を殺せ——つづく』

「俺が何をした——つづく」

跳ね起きながらダッシュする雄一。それを追尾するFクラス男子生徒たち。

それを見送る明久と綾香、そして、瑞希に美波。

皆の姿が見えなくなつたところで、明久にしがみつくようなかつこづの綾香の口が悪魔のように笑う。

「ざまみろバカ雄一」

先ほどのしおらしい態度はどこへやら。小憎りじこほどのいい笑顔になる綾香。

それを見て、美波と瑞希は軽く嘆息する。

「やつぱりね」

「ダメですよ？ 綾香ちゃん。あれじゃ坂本君が氣の毒ですよ？」

苦笑いを浮かべる美波と、軽く諭そうとする瑞希。それに対してぶーぶー文句を垂れる綾香。

不意に、明久の肩をつかんで強ばつていた綾香の手が優しく包まれた。

明久がそつと彼女の手に自分の手を重ねたのだ。

それだけで、綾香の体の奥が落ち着きを取り戻していった。

そんな四人を見つめる一対の目。その目は綾香に強い意志をぶつけるかのように細まる。

長い黒髪を翻し、立ち去る影。

そのまなざしが意味するものは……。

少し経つて。

その教室には奇妙な集団が集まっていた。

上方に向かつて尖つた黒い被りものとこれまた黒いマント。手には大鎌を携え、衣装には『F』の文字がワンポイントで入っていた。

そんな装束の“怪人”が数十名集っているのだ。そしてその中央には、猿ぐつわをかまされたうえに縛られて転がされている雄二の姿。

『諸君。ここはどこだ?』

『『『最後の審判を下す法廷だ!』』』

『異端者には?』

『『『死の鉄槌を!』』』

『男とは?』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの!』』』

『宜しい。これより……2・F異端審問会を開催する!』

もはやそこはサバトの会場だった。

裁判が何かのように罪状が読み上げられ、蓑虫のよつな雄一の罪が読み上げられていく。

むろん雄一は反論しようとするが、猿ぐつわまで咬まれ、罪を認める台詞をねつ造されていた。

その様子を明久と美波は、とても残念なものを見る目で眺め、瑞希は苦笑いを浮かべている。どうやら「冗談だと思つたらしい」。

一方で綾香は……。

「アハハハハ、アツハハハハハハハ

腹を抱えて笑っていた。

だい はちもん……かな?

廃屋のような教室内に十字架が打ち立てられ、そこに雄一が掛けられる。

すでに灯油とライターまで用意されたあたりで、雄一の顔がひきつった。

一方、そんな雄一を見て笑い転げていた綾香もそろそろ落ち着き始めていた。

「あー笑った笑った。あ、でもさアツキー」

と、彼女の隣に立つ明久へと顔を向ける。

それに彼が応じると、綾香は花が咲くよつこに笑いながら二つ言いつ放つた。

「あいつら、すっげえおもしろかつたけど、正直“キモイ”な」

その言葉に異端審問会の面々の動きがピタリと止まる。

「なんだろーな? あんな“キモイ”ことしてたら、女の子に避けられるよなー?」

しみじみつぶやかれた言葉に白くなり、ピシリとヒビが入った。

「あたしだつたら絶対近づきたくないなあ」

全員、砕け散つて灰になつた。

その様子を見た綾香は、彼らを指差しながら腹を抱えて笑う。

そんな綾香を見て、明久は苦笑いを浮かべると口を開いた。

「騒動の発端は綾香じゃないか。そんなこと言つちや…………別に構わないか」

綾香を注意しようとした明久だが、ハツとなつて顎に手を当てる意見を翻す。

その言葉に綾香は我が意を得たりとばかり笑顔になる。

「でしょでしょ? !」

おおげさにはしゃぐ綾香を見て、明久は柔らかく笑つた。

つられて美波と瑞希も仕方ないとばかりに苦笑いを浮かべる。

「…………？」

そんな彼らをファインダーに収めていた康太は、微妙な違和感に首を傾げていた。

不意にフレームインした明久が彼の方を見て、人差し指を口に当てるてみせる。

そこで気づいた。

綾香の表情がわずかに硬いことに。

これには康太も驚いた。こと、女子が絡むことならば細やかな機微に至るまで気づける彼が、ほとんど気づかないような違和感を、明久がすでに感じ取つていたことに。

だからこそ、明久は綾香の近くで一緒に笑つているのだといつことに。

「…………フ」

小さく笑い、デジカメを仕舞う康太。
どうせ撮るなら、その女子の最高の顔を撮る。
それが康太のやり方だった。

福原教諭が廃材を片づけ、新たな教卓をやつとこを発見して戻つてきたことにより、騒動は終息を見せた。
それ以前にFクラスの大半が屍になつてゐるわけだが。
そして珍しく怒つた感じの福原教諭に注意された綾香が、ちょっとしおげたのは完全に余談だ。
「くつそ、ひでえ目に遭つたぜ……」
ボロボロの雄二が肩で息をしながらつぶやくと周りを見回した。
広がるのは死屍類々としたクラスメイト達。
彼らが一応復活するのを見計らつて先ほどの話を続ける。
「はあ、グダグダになつちまつたが……。あー、どこまで話したん

だつたかな？ とにかく！ 僕たちなら勝てる！！ そのための方策も、“ここ”にある！！

自分の頭を指しながら力強く言う雄一。

「みんな、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば戦争だ！！ 全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

『おおーーっ！！』

「俺たちに必要なのはちゃぶ台じやない！ Aクラスのシステムスクだ！」

『うおおーーっ！！』

「おーーー」

一度鎮火しかかった炎が、今再び燃え上がった。

綾香もノリノリである。

「よし。まずは俺たちの力の証明として、Dクラスを落とす。明久！」

「ん？ なんだよ雄一！」

「お前が宣戦布告の使者だ。大任だが、お前にしか任せられないと思つてゐる」

威厳たっぷりに言う雄一。しかし、当の明久の反応は薄い。

「…………下位勢力の使者って、たいていひどい目に遭うよね」「バカを言うな。大事な使者にそんな事をする訳がないだろう？」

騙されたと思って行つてみる。大丈夫だから

まじめな顔で返す明久に、雄一も真剣な顔で応じる。

その表情を見て、明久は軽く息を吐いた。

「仕方ないか。じゃあちよつと行つてくれるよ」

言いながら立ち上がる明久。

それを綾香が見送る。

「おー がんばれよーアッキー！」

その口元に、悪魔のような笑みを浮かべながら。

ちなみに、秀吉は未だに灰化から復活出来ていなかつた。

だい きゅうもん！ のさ

「失礼しま～す。代表の方おられますか～？」

ところ代わつてDクラス。宣戦布告の使者となつた明久は、その教室の戸を開けた。

誰かを呼ぶ声が聞こえ、奥から一人の少年が姿を現す。

「俺が代表の平賀だけど、なんのようかな？」

少し不思議そうな顔で明久を見る平賀。

「えつと、僕はFクラスの吉井明久だけど……」

明久が自己紹介をして用件を告げよつとした瞬間。

『て、天使ちゃんつづ？…』

素つ頓狂な声に遮られてしまつ。しかも明久は、その声に聞き覚えがあつた。

「こ、この声……ま、まさか……」

恐る恐る声のした方を見た瞬間、黒い影が明久に突進してきた。

「キヤー——ツツ

天使ちゃんキタ——つ…

「グフオツ？！」

しつかり腹筋を締め、腰を落としていたにも関わらず、明久の体が一メートルは後退した。

「た、玉野さん……」

文学少女然としたこの少女、玉野美紀の姿に明久はげつそりとなる。

「天使ちゃん天使ちゃん天使ちゃん天使ちゃん天使ちゃん天使ちゃん

天使ちゃんを連呼し、顔を明久の体に押しつける美紀。
しかし明久もされるがままではない。

美紀の右肩を取つたかと思うと、彼女の右腕から力が抜け、するりと抜け出す。

「ナニヤ」

つんのめつて顔から床へダイブしそうになる彼女の後ろ襟を掴み、自分の足で相手の足を引っかけるようにして落とす。

すとん

と、重力に従つて床に尻を着ける美紀。なにが起きたのかわから
ないような顔でクエスチョンを飛ばしまくる。

その様子を見た明日は、美穂は懲りない懲りをさせてしまったが、ことに安堵してか、小さく息を吐く。

が這る銚子殺氣に体を反らにかゝる瞬間を、金色の光線を放つ殺意の塊のようなものが通過する。

その声に振り向くと、燈色の髪を螺旋を描くドリルツインテールにした少女、清水美春が気配だけで人を殺せそうなドス黒いオーラを吹き出しながら彼を睨んでいた。

「清水さんまで居たの？」

一年の後半くらいに明久が知り合ったこの二人の少女。それぞれ違う意味で明久を狙っている。

「ま、マズい……」

顔をひきつらせてつぶやく明久。

次の瞬間、背筋に寒いモノを感じて避けると、明久の首元を何かが通過した。

それは制服の黒い袖だ。

その先に伸びる白い手には、文用学園指定のネクタイ。あの一瞬で抜き取つたらしい。

見ればその手の主は、復活した美紀だつた。

「さあ、天使ちゃん！！ お着替えしましょう！」

「豚野郎！ 死になさい！」

美紀が明久に迫り、美春の手からはいくつもの文房具が投げ放たれる。

「くつ？！」

軽くバックステップしながら、すばやく上着を脱いで左腕にもち飞翔してくる文房具をなぎ払う。

そして右から伸びてくる美紀の手を、右手一本で弾いていく明久。その間にもどこに隠していたのか大量の文房具を投擲する美春。

二人の猛攻に、防戦一方になる明久。

そんな彼らを見つめるDクラスの面々と、戸口から覗いてくる蒼い瞳とボリュームが有りすぎて隠しきれない金色の癖つ毛。綾香だ。

教室をこつそり抜け出し、明久の様子を見に来たらしい。

その口元には、あの、小悪魔のような笑み。

どうやら明久の窮地を楽しみに来たらしい。

ピンチの明久。

それを楽しげに眺める綾香。

はたして宣戦布告は出来るのだろうか？

だいじゅうもんだよ

Dクラスにて、一匹のケモノ相手に苦戦する明久。
その視界の端に、ボリュームのある金色がかすめる。
一瞬そちらに視線を向けて確認すれば、それが綾香の金髪だとすぐわかった。

そして、口元にはあの笑み。

「つて綾香あつ！ おまえ知つてたなつ！？」

攻撃を捌き続けながら声を上げる明久。

すると綾香が笑みを深くする。

しかし、明久にはそれを確認する余裕もない。たまりかねて声を上げてしまつ。

「くつ？！ 見てないで手伝つてよつ！ 綾香つ！」

「えー。どうしようかなあ」

必死な明久に対し、値踏みをするように返す綾香。

その様子に、明久は渋面を作る。

次第に追いつめられはじめる明久。

「ぐつ！？ くくつ！？ ジょ、条件はつ！？」

苦し紛れに叫ぶ。と同時に綾香の蒼い瞳が輝いた。

「今日のお昼はアツキー持ち、夕食当番も交代ね？ 後帰つたらマツサージね」

「ふつかけすぎだろつつ！」

綾香の出した条件に、思わず突っ込む明久。

すると綾香は大げさに肩をくめた。

「ああ、残念だな～。従弟が女装趣味に走ったあげく、グロテスクに殺されるなんて……。いやー残念残念」

そう言つて見せつけるようにきびすを返して立ち去りうとする綾香。それを感じて明久はあわてた。

「ま、待つたあ——つ——！」

思わず叫ぶ明久。その横を文房具がすっ飛んでいき、綾香が足を止めた。

「飲む！！ さっきの条件飲むからつ！！ 助けて綾香あつ——！」
徐々に追いつめられ、半泣きになりながら承諾する明久。
しかし。

「えー。でもさつき断られたしな～」

言いながら渋り、横目で明久を窺う。

いよいよ進退窮まり始めた明久はマシンガンのように繰り出される美紀の手を片手で払い続ける。

「……帰りにプリン買ってあげるからつ！！」

飛来する文房具から飛び退き、もはや後が無いとばかりに叫ぶ明久。綾香の足が止まり、勝ち誇ったかのような顔になる。

「一個ね」

「わ、わかったあつ——！」嬉しそうに言う綾香に、明久はやけくそ気味に答えた。

次の瞬間、美紀の目の前に金色の影が踊り込む。

「！ あ、綾香ちゃん？！」

「また邪魔をするのですかつ？！ 夏田綾香——！」

その影に、見覚えのある蒼い瞳を認めて驚く美紀と美春。

「交渉成立」

言いながら美紀の前に立ちはだかる綾香。それを見て美紀は綾香に手を伸ばす。

「なら！ 天使ちゃんの前に綾香ちゃんにお着替えを！」

「ごめん美紀ちゃん、あたしは“それ”バスだわ」

美紀に苦笑いしながら答えた綾香は、伸びてくる手をすべてパリングしていく。

美紀と綾香の腕が見えなくなるほど速度で繰り出され、手を打ち合わせる音が、マシンガンを撃つかのように響き渡る。

が、終わりには唐突にやつってきた。

「きやつ？！」

美紀の可愛らしさ悲鳴とともに彼女の両腕が上に向かって万歳するように振り上げられた。

綾香が美紀の手を捌くと同時に、角度とタイミングを調整して上に弾いたのだ。

そのまま美紀の右脇を抜けるように左足を踏み出し、右腕を横へ軽く出しながら、一の腕を相手の鎖骨に当て、右足で美紀の両足を刈る。

刹那、綺麗に宙を舞う美紀。

「にやつ？！」

悲鳴を上げ一回転しながら落ちる彼女の首根っこをひつかんで床に叩きつけられるのを防ぐ綾香。

「おつとつと。危ない危ない。で、アッキーは

田を回した美紀をその場に横たえ、長い付き合いの従弟へ信頼しきつた目を向ける。

その彼女の視線の先で、大きく振り回した制服の上着を田くらまにして美春の背後に回り込み、その首筋に手刀を落とす明久の姿があつた。

だい じゅういちもんかもね

「な、なんとかなつたあ……」

大きく息を吐きながらつぶやく明久。もはや天敵と呼ぶに等しい二人だが、やはり女子を殴つたりはしたくない。

かといって手加減しながら二人同時に無力化するのは難しかったのだ。

「お疲れ」

と、ボリュームのある金色の癖つ毛を揺らし、蒼い瞳の少女が明久の元へ歩み寄りながら片手をあげる。

「うい／＼／＼」

疲れた声を出しながら明久も片手を上げ、一人で打ち合わせた。「つて！ 綾香あの子たちがDクラスだつて知つてたな！」

声を上げた明久を見て、綾香が軽く驚く。

「あ、覚えてた。いや、美紀からメールが来ててさ、それに美春も居る旨が書かれてたんだよね。アツキーが面白……マズい事になると思って野次馬……心配で見に来たんだよ。いやあ、無事で良かつた良かつた」

顔に憂いの表情を浮かべながらそう言つ綾香を見て、明久はジト目になる。

「本音がだだ漏れてるよね？ それ」

指摘され、不家のペちゃん顔になる綾香。

それを見た明久は、深く深く嘆息する。

「あ、あのー……」

不意に声をかけられ、顔を上げると、Dクラス代表の平賀が所在なさげに佇んでいた。

「俺に用事つて……？」

平賀の言葉に、明久がアツとなり、綾香もそちらを見る。

「あー、あの一人のことでの、すっかり忘れてたよ……」「まだ言つてなかつたの？」

肩を落としつぶやく明久に綾香があきれたように言ひ。

「言つ前に襲われたんだよ……。だいたい綾香が事前に教えてくれれば……」

「うまく対処できたつて？」

「いや、何としてでも雄一に押しつけた」

それを聞いて、綾香が快活に笑う。

だが、Dクラスの面々の困惑は深まるばかりだ。

「和んではるところ悪いんだが、早くしてくれないかな？ 僕も暇じやないんだ」

焦れたように声をかける平賀。言われた明久は愛想笑いを浮かべながら、ゴメンゴメンと返す。

「えーと、改めてFクラスの吉井明久です。僕たちFクラスは、Dクラスに対して宣戦布告します」

「……え？ 宣戦布告？ Fが？ Dクラスの俺たちに？」

さらりと言われた宣戦布告に呆気にとられる平賀。

「開戦は午後一つことで じゃ、戻ろつアツキー！」

その隙に明久の言葉を綾香が引き継ぎ、彼の腕をとつてさつさと退室していく。

後には今起きていた騒動と、宣戦布告されたことに困惑するロクラス一同が残された。

廊下に出るなり、綾香は上機嫌で明久の左腕に右腕を絡め、手のひらを合わせて絡めるようにして手を繋ぐ。

「おつ昼つは、なつに食べよつかな あ、デザートもつづけよつと いいよね？ アツキー」

「……ハア。別にかまわないよ」

楽しそうに訊ねる綾香に、明久は億劫そうに答える。

「むーカー悪いぞ？ アツキー。楽しめ楽しめ」

そんな明久に、綾香は口をとんがらかせるが、すぐに笑顔になつた。それを見た明久は自分の顔が、自然と弛むのを感じた。

『ちつ。夏田の奴、俺を袖にしておいてあんなバカとイチャつきやがつて……。この俺をバカにするどどつなるか、思い知らせてやるからな……』

だい じゅうにもん！ だよ！？

お皿の上に載せられたハンバーグへ、乱暴にフォークが刺さる。その衝撃に一口サイズに切られたそれと、お皿が跳ねた。

への時に結ばれた口元へそれを運び、金髪の少女、綾香が仏頂面でそれを頬張つた。

「なによアツキーフてば！ 雄一がアツキーを戦力に数える訳無いんだから、ミーティングなんて出る必要ないのに！」
「ふんすか怒りながら食事を続ける。

あの後、教室に戻つた一人だが、明久は食事をしながらミーティングをするという雄一達についていつてしまつた。

その前に、明久は自分の財布からお金を出して、綾香に渡し、一人で食べに行くよう言つてきた。

明久的には、昼食は明久持ちというのを履行したつもりなのだろう。

だが、綾香は明久と二人で一緒に学食で食べるつもりだった。
そこで二人は揉めてしまつた。

結局に明久はミーティングへ。

綾香は一人で学食へ来てしまつた。

「食事をアツキーが持つ話なんだから、一緒に来るのが当たり前じやない！」

ぶつぶつ文句を言いながらハンバーグの定食を平らげていく綾香。
と、そこに近づく影があつた。

「……なんだか荒れてるわね？」
「ふへ？」

かけられた声に、ハンバーグを頬張つたままそちらを見る綾香。
そこにいたのはキツい感じの顔が特徴的なCクラス代表の小山友香がサンドイッチとミルクを載せたトレーを手に立つていた。

その姿に、綾香は口の中のものを急いで嚥下していく。

「ふはー。やつほ ゆつか」

去年クラスメイトだったこともあり、にこやかに挨拶する綾香。
「おひさ。なんだか荒れてるみたいだけじ、どうしたの？」
対して友香は軽くはにかむように返すと、となり良い？ と、訊
ね、綾香がうなずくのを見てから席に座った。

「それがさー、聞いてよ、ゆつか。アツキーがわー」

仮頂面のまま切り出す綾香が珍しく、友香は聞く体勢になる。

「アツキーって吉井君？ 綾香の彼氏の？」

「違うつて。ただの従弟だよ。で、そのアツキーがさあ……」
と話を続けていく綾香。友香はそれを聞きながら顎に手を当てる
いる。

「……なるほどねえ。試合戦争か。けど綾香、はつきり一緒に食べるつて約束をしたわけじゃないんでしょう？」

そう言われて綾香はフォークの先をくわえたまま固まつた。

「それは…… それだけ……」

バツが悪そうに目を逸らしつづぶやく綾香。
言つていることは解る。けれど納得できない。

綾香はそんな表情だ。

その様子を横目で見ながら、友香は軽く嘆息する。

「吉井君が坂本君たちに着いていつたのには意味があるのかもよ？
ちゃんと話し合つた方が良いわね。本格的にこじれる前に」

「…………うん」

しななりうなずく綾香。それを見ていて友香はため息一つ。

どう見ても痴話喧嘩だが、本人達にはまるでそのつもりがないら
しい。

去年から見ていてやきもきすること甚だしいが、踏み込みすぎる
のもこじれる要因だ。

だが、友香は普段見ているだけで元気になれるこの友人の力にな
つてやりたかった。

「はあ。あ、そうだゆっか」

ため息をついた綾香が突然なにか思い出したような顔になる。

友香はまた相談かと、食事の手を止め、綾香の方を見た。

「なに?」

そう訊ねてくる友香に、綾香は口を開きかけ、軽く思案しつつ頭を軽く搔き始めた。

珍しく言い淀む彼女を、訝しげに見る友香。

「どうしたの?」

怪訝な様子で聞いてくる友香に、綾香は苦笑いを浮かべた。

「いやその……彼氏で思に出したんだけど……」

「?」

はつきりものを言ひ綾香にしては珍しい歯切れの悪さで、友香は首を傾げる。

「…………うん、やつぱ言おつ。ゆつかの彼氏なんだけど……」

「恭一? 恭一がどうかしたの?」

「うん、その恭一君なんだけどね? 一月の頭くらいにあたしに告つてきてた……」

「…………は?」

友香の目が点になつた。

「断つたんだけどしつこいつて……なんとかならない? 電話までかかるてきてさ」

「へ、へえ……恭一が綾香にね……」

ひきつり気味に答える友香。

「やっぱ知らなかつたんだ。こんなこと言いたくないけど、彼はやめた方が良いと思つよ? いい噂も聞かないし……」

綾香は申し訳なさそうに続ける。すると友香はふりふりと立ち上がつた。

「教えてくれてありがと。……ちよつと、恭一と話しあつてくるわ

ね

「う、うん……」

黒いモノをまといながら学食の出口へ向かつた友香を見送りながら、綾香は教えない方が良かつたかなあ。と、ひとりごちた。

だい じゅうせともんだい！！

カリカリとペンを走らせる音だけが、その教室に響く。

その教室に、幾人かの教師と、女生徒一人。

Fクラスの姫路瑞希と夏目綾香の一人が、試験を受けていた。

午後の授業開始時間と同時にFクラスはDクラスと交戦状態に入った。

それと同時に、点数の無い瑞希と綾香は回復試験に挑むことになる。

集中して問題を解いていく瑞希に対し、綾香は気もそぞろで集中できていなかった。

それもそのはず、綾香は結局明久と話が出来ていなかつた。いろいろ悩んでいるうちに昼休みが終わりに近づき、あわてて戻つたときには、すでに開戦準備。

そのまま開戦してしまい、明久は前線へ。綾香は別室で回復試験に挑むことになった。

現在受けているのは数学のテスト。綾香がもつとも得意とし、一番好きな科目だ。

数式をパズルを解くかのように解いていくのが楽しく、寝食を忘れて解き続けることも出来るほどだ。

それが、まるで楽しくない。

どうしても明久の事が気になってしまい、それが彼女の集中を阻害しているのだ。

気持ちは晴れないまま、綾香の回復試験は続いていた。

一方、前線。

前衛がDクラスの先陣と激しい銃迫り合いを繰り広げていた。

その様子を見て、中堅部副隊長の島田美波は、中堅部隊が待機するEクラス前まで戻ってきた。

「吉井！ 木下の前衛部隊が、Dクラスとの戦闘に入ったわよ！」

「……」

しかし、美波の報告を聞いた隊長の明久は何の反応も見せない。そんな彼の様子に、美波が怪訝そうにする。

「吉井？ 吉井つてば！」

「……」

何度か呼んでみるが反応がない。

次の瞬間、美波の顔が特大の青筋となつた。

「シャキッとしなさい！！」

「「ぶらば」「べしゃつ？！」

美波の声とともに明久の横つ面くと「一クスクリュー・プロウが突き刺さり、明久の体はきりもみしながら吹っ飛んでいった。

「まったく、ほんやりしてないでよね！ 木下達が支えきれなくなつたら、ウチ達が代わりに前線を支えなきゃいけないのよ？ 隊長のあんたがそんなんじや困るのよ！」

「う……そ、そうだね島田さん。僕たちのすぐ後ろは本陣。中堅隊が頑張らないと、後方で回復試験を受けるみんなが安心できないもんね」

そう言って立ち上がる明久。

それを見てうなづく美波。

と、そのとき、誰かの声が響いた。

『前衛が後退をし始めたぞ！』

その声に、明久は表情を引き締めながら口を開いた。

「よし、中堅部隊は前進するよー 後退していく前衛のみんなを援護しつつ、戦線を形成するんだ！」

明久のその声に、中堅部隊が移動し始める。

護しつつ、戦線を形成するんだ！」

すると、向こうから男子の制服をまとつた美少女が走ってきた。

「木下！」

「む？ 島田に……明久か。すまんが頼むぞい。前衛部隊はボロボロじやし、ワシの召喚獣も大分やられた」

「わかつたよ、秀吉。後方で回復試験を受けてきて」

「…………んむ」

明久に言われるも、視線を外しながら脇を抜けていく秀吉。

そんな彼を、明久は少し悲しそうに見送った。

「どうしたのかしらね木下の奴。ミーティングの時も、あんたに目を合わせようとした」

「そりだつた？ 僕は気づかなかつたけど。疲れてるんじゃないかな？」秀吉

「そう言つて」まかす明久だつたが、内心、美波がなにか言い当てるのではないかと冷や冷やしていた。

「そんなことより、今は戦争に集中しなきやね？ そう注意したのは島田さんだよ？」

「…………わかつたわ。行きましょ 吉井」

釈然としない面もちのまま、美波は動き出す。その後ろ姿に、明久の口が小さく何かをつぶやいた。そして後方へ走りゆく秀吉の背中へと一瞬視線を巡らせてから、瞑目し、振り切るように見開いて前線へと走り出した。

だい じゅうよんもんね。

派手な金属音を響かせ、火花を散らし、レイピアとロングソードが激突する。

「美春いい加減にして！ ウチにそのケは無いのよつ……」

「嘘ですわつ！ 美春とお姉さまは永遠の愛によつて結ばれているのですわ！」

「ウチは普通に男の子の方が好きなのよつ……」

「あり得ませんわ！！」

ポニー テールを揺らした美波と、ドリルツインテの美春の応酬が続く。

前衛部隊と交代した中堅部隊。しかし、戦力的に劣るFクラス側は、そこかしこで劣勢に迫りやられていた。

隊長格である明久や美波も参戦し、そこを美春に突かれた形だ。

「よ、吉井！ 援護を！」

押し切られそうな美波は、明久に助けを求める。

と、同時に美春から吹き付けるような殺氣を放射される。

「美春の邪魔をする豚はすべて口口します！」

Dクラスで相対した時を大きく上回る迫力。周囲の人間は、教師も生徒もDもFも関係なく怖れおののく。

ただ一人をのぞいて。

「試^{サモン}獸召喚」

言靈に応じ、魔法陣が広がつて、門が開く。

そこに顯現するは、一匹の使役獸。

両腕に籠手を墳め、学ランをまとい、右肩の肩当てに当てるよう に木刀を肩に担いだ召喚獸。主である明久の姿をディフォルメした その姿でたたずむ。

その頭上に示される点数は、“46”。

「そんな雑魚召喚獣で美春に勝てると思わない」とです！」

召喚したことで、敵対行動と認識した美春は、美波の召喚獣を捨て置き、明久の召喚獣へと己の召喚獣を走らせる。

突き出された剣を召喚獣に避けさせる明久。左足を引いて半身になるだけで、攻撃の軌道から外れ、美春の召喚獣はそのまま走り抜ける。

と、明久の召喚獣が足を引いた勢いのまま体を旋回させ、籠手のはまつた腕を、美春の召喚獣の後頭部にたたき込む。ダメージを受けてたたら踏んだところへ、すかさず木刀を突き入れた。

後頭部をさらに痛打され、一気に点数が減る美春の召喚獣。

「そ、そんなバカなっ！ 美春の召喚獣の方が強いはずですわ！」

「いいようにあしらわれてダメージを受けたことにショックを隠せない美春。

一方で明久はため息を吐く。

「やっぱ非力だなあ。もう少し点数採れるように頑張んないと……」「戦闘中に余裕ですわね！」

美春の召喚獣が振り向きながら明久の召喚獣へと切りかかる。それを丁寧に避けさせ、明久はカウンター気味に木刀で美春の召喚獣を叩いていく。

みるみるボロボロになつていいく美春の召喚獣。

「こ、こんな……こんなことが……」

為す術もなくやられていく自分の使役獣の姿に動搖する美春。そして。

「スキありー！」

「あ

横合いから美波の召喚獣が美春の召喚獣に切りかかり、倒してしまった。

あまりのことに、明久は目が点になる。

「あーーっ？！　み、美春の召喚獣がっ！！　オノレ吉井明久あつ
！！　かくなる上は、お姉さまだけでもつ！！」

「に、西村先生！　戦死者です！　早く連れていって下さい！」

実力行使に及ぼうとする美春を指さし、美波が西村教諭を呼ぶ。

「ほう、清水か。たっぷり補習漬けにしてやる。覚悟しろ！」

「は、放して下さいまし！？　お姉さま！？　おねーさまー！？
こうなったのも、全部吉井明久のせいですわッ！！　無事に卒業で

きると思わないで下さいまし！！　この豚野郎あーーっ！！」

西村教諭に抱がれながら叫び続ける美春。

その様に、戦争は一時的に停止していた。

そして明久は。

「……トドメさしたの、僕じやないのに……」
がっくりとうなだれていた。

「だいじゅうじもんだ！」

「回復試験お願ひします！」

聞こえてきた女子生徒の声に、綾香は顔を上げた。

聞き覚えのあるその声は、美波のものだ。

その前にも、秀吉と数人の男子が回復試験を申請しているのを綾香は聞いている。

「科目はどうしますか？」

「化学をお願いします」

前線のメイン科目は化学らしい。秀吉らも大半が化学の回復試験を受けている。

綾香自身はこれまでに数学と世界史を終わらせていた。

雄一の話では、時間稼ぎを主とするため、途中で世界史へと科目変更すると言つことだつたからだ。

そして今、美波が化学の試験を受けにきた。

美波は明久を隊長とする中堅部隊の副隊長だ。

それが回復試験を受けに来たということは、かなり劣勢なのかもしない。

綾香はいつたん軽く瞑目しながら思索し、ついで目を見開くと、手を挙げた。

「先生！ 採点お願ひします！」

「いいんですか？ 夏田さん。まだ二十分ちょっとありますよ？」

綾香の言葉に驚いた“化学”教師がそう言つてくるが、綾香はつきり「ハイ」と返事をした。

その様子に瑞希と秀吉も驚いて顔を上げる。

化学教師がテストを回収し、手早く採点していく。

「はい、採点終了です。これは入力しておきますが、次はなにを受けますか？」

「いえ、結構です」

次のテスト科目を聞かれるも、それに首を振つて立ち上がる綾香。ついで走り出した彼女に驚いて、皆が振り向く。

教師の注意する声を背に走る綾香。

その音を聞きながら、秀吉は唇を噛んだ。

一方、廊下戦。十八人居た明久率いる中堅部隊はすでに半分を切っていた。

Dクラス側にも相応の被害を与えたものの、戦力差があることは否めない。

部隊はもう半包囲されかけており、明久も召喚獣を呼び出し応戦している状況だ。

「……やっぱり地力が違うな」

被害の拡大を見て、一人ごちる明久。戦い続けた疲労がフィードバックとともに蓄積し、すでに肩で息をし始めている。

その召喚獣も、彼同様ぼろぼろの様相ではあるが、いまだ点数が三十点台をキープしているのは明久の操作技術のたまものだろう。だが、その動きは明らかに精彩を欠いていた。

「吉井明久覚悟！」

「大人しく討ち取られてよね！」

一体の召喚獣による同時攻撃。

「く……」

迫る長剣を籠手でいなしながら、頭上に迫る戦斧の持ち手を木刀で叩いて軌道をそらす。

そのまま体が回転し、長剣持ちの頭を蹴り飛ばし、体勢を崩した戦斧持ちの脇腹へと拳が突き刺さった。

もんどううつ戦斧持ちを置き、長剣持ちへと踏み込んで木刀を相手へ突き込む。

その戦死を確認せずに戦斧へと振り向き、床をこするように木刀をアッパースイングで相手の顎へ打ち込み、さらに返す刀で頭頂を殴りつけた。

そして粒子に還る一匹の召喚獣。

明久の操作技術と戦いの知識と経験が、彼の召喚獣を点数では測れない強さに押し上げていた。

だが、彼以外のものはそうはいかない。

『だ、ダメだ！ やられる！』

『くそつ！ すまん吉井！』

『た、助けてくれ！ 補習はゴメンだ！』

『だ、だれか援護をつ！』

あつという間に討ち取られていく中堅部隊の男子生徒たち。

「み、みんなつ！？」

討ち取られていく仲間の姿に明久は動搖する。

そこへ攻撃を仕掛けられた。

「お前にも引導渡してやるよ！」

「くそつ！」

悪態をつきながら攻撃を避けさせる明久。だが、消耗し尽くし、五人からに囲まれた状況は絶望的だ。

逃げることもかなわぬなら、一人でも道連れにとばかりに明久が構えた瞬間。

キュキュツと、上靴が廊下をこする音が響き、その言霊が響いた。

『試獣召喚！』

同時に一本の飛刀が飛び、一匹の召喚獣を貫く。

そして、明久の視界の端に、金糸が舞つた。

『……綾香』

つぶやく明久に応えるようて、蒼い瞳が彼を見た。

だい じゅうろくもんなんだな

「……綾香」

「……アツキー」

二人の視線が絡み合い、眼差しが揺れる。

一人がどちらからともなく口を開きかけた瞬間、それを難ぎ払う
ように大声が響く。

Dクラス前線指揮官の塚本だ。

『残り数人だ！ 一気にしとめる』

その声に従い、残っているDクラスの大半が、化学のフィールド
へ突撃してくる。

二人はそちらへ向き直り、召喚獣を身構えさせた。

文月学園の冬服に、ガントレットとレガースを装備しただけの、
ディフォルメ綾香な彼女の召喚獣が、両手に一本ずつ持った紐を引
くと、それが柄頭に繋がった柳葉刀が引き戻され、それを器用にキ
ヤツチする綾香の召喚獣。

その頭上の数字は“ 81 ”。

並ぶように立つ明久の召喚獣は、“ 24 ”だ。

『残りは一人だ！ 一気に押しつぶせ！』

その声に気づけば、中堅部隊の男子たちは一人残らず討ち取られ
ていた。

対してDクラス部隊は、消耗はしているものの、十人以上残つて
いる。

絶体絶命である。

にも関わらず、二人の顔には、焦燥も絶望も無い。

あるのは、互いの隣に立つ従姉弟への信頼感と安心感。

喧嘩をしていても、隣に立てば安心できる。

そんな顔の二人が居た。

『押し包めつ！…』

だがそんなことはDクラスの面々には関係ない。

塚本の号令に従い、十人からのDクラス召喚獣が化学のフィールドを走る。

その前へ、綾香の召喚獣が柳葉刀を手放しながら、ステップを踏むように躍り出た。

左腕を大きく振り回すと、紐で繋がれた柳葉刀が大きく振り回され、召喚獣たちを難ぎ払う。ついで綾香の召喚獣が、くるんと回転しながら右手を振るい、もう一方の柳葉刀が飛翔する。

それを受けた一体が光に還るのを待たずに綾香の召喚獣がステップを踏みながら両腕を振りかざし、回転しながら腕を開いて屈み込む。

さりに伸び上がるよつに立ち上がりながら腕を振りあげた。

そんな舞いに合わせ、一本の飛刀がフィールド内を縦横無尽に舞い踊り、Dクラスの召喚獣を切り裂いていく。

美しいまでの“死の舞踊”
ダンスマカウル

それを召喚獣にあわせて綾香自身も舞う。

舞い踊る黄金の髪と、すべてを見透かすかのような蒼い瞳に、男女を問わず見とれてしまう。

その隙が、彼らの命取りだ。

彼らが見とれたのは、殺戮の舞い。その意味を彼ら自身が身を持つて体験することとなる。

そんな死の刃が乱舞する中を、明久の召喚獣が疾る。刃と刃の間を潜り抜け、綾香の攻撃でダメージを受けた相手に一撃を加えて離脱。すかさず反撃に出よつとした相手は、真横から迫った柳葉刀に切り裂かれて光に変ずる。

アイコンタクトすら交わさぬ絶妙のコンビネーション。

綾香の刃が自らに当たるわけもないとばかりに駆け巡る明久の召喚獣。そして、綾香も明久に当たるわけがないと一本の飛刀を自在に振るう。

気づけば、ものの一分も経たずに、十体以上居たロクラスの召喚獸が五体にまで減じていた。

『な、なんてコンビだ……』

『こんなに強いなんて……』

『く、ほ、補習はゴメンだぜ』

一人のコンビネーションに、ロクラス側の動きが止まった。その時、よく通る大きな声が廊下に響きわたった。

『明久、夏田、あと少し持ちこたえろー。』

聞こえた声に、一瞬そちらを見る一人。

「スキ有り！」

思わぬ方から聞こえた声に、綾香がそちらを見れば、己の召喚獸に凶刃が迫っていた。

だい じゅうなもんツス。

綾香の召喚獣に迫る凶刃。その刃が到達するより早く、そこに割り込む姿があった。

明久の召喚獣だ。

そのまま刃が彼の召喚獣の胸食い込み、あつという間に点数が無くなる。

そしてその刃の持ち主にもまた木刀が突き込まれていた。

当時に光へ還る一匹の召喚獣。

その様に、綾香の蒼い瞳が見開かれた。

するとすかさずそこへ、巖のごとき地獄への使者、鉄人西村宗一が現れる。

「戦死者は補習！！」

その声を聞くなり逃げ出したDクラス生徒をあつさり捕まえ、ついで明久へ目を向ける鉄人西村教諭。

「……なんだ逃げんのか吉井」

油断無くそう明久へ声をかける西村。

その言葉に明久が胸元へ手を当てながら苦笑いする。

「あはは、今更逃げても無駄でしょうし、それに……」

「それに……？」

軽く瞑目してうつむく明久。西村はその言葉の続きを促す。

「それに、守りたいものを守れましたから、後悔はないです」

晴れやかな様子で顔を上げる明久。

その言葉に、西村が口の端を緩める。

「そうか。なら補習室へ向かうぞ吉井」

「はい」

素直に西村に続く明久。

「あ……。アツキー……」

その様子を、綾香は呆然と見送る以外無かった。力無く持ち上がり腕は、明久に届くことは無く、ただただ無為に宙をさまよつた。

「大丈夫だったか？ 夏目。明久は戦死か。まあ大勢に影響はないだろう」

本隊を率いて出ぱつてきた雄一は、綾香の元にたどり着いて開口一番にそう言つた。その周囲では残敵の掃討戦が繰り広げられている。

それを眺めて綾香は少しうなだれた。

「……そつかもね」

そう雄一に応え教室へと足を向ける綾香。

その様子に、雄一は小さく息を吐く。

「……明久が気になるのか？」

「え？ あ、ああそうね。あたしを庇つて戦死したわけだしね。まったくバカだよね。せっかく補習を受けずに済みそうだつたのにね。だからアツキーはバカだつて言われるんだよ……」

いつもの快活さはそこに無く、少し困ったような顔で笑う綾香。それを見た雄一は嘆息する。

「……ま、良いさ。掃討も済んだようだし、一端教室に戻るぞ。全員撤収だ！」

雄一の号令一下、Fクラスのメンバーが教室へ向けて歩きだす。綾香もそれに続こうとして一端足を止め、明久が向かつた先を見つめ、軽く唇をへの字に結んでから教室へ足を向けた。

「さて、回復試験を受けていた連中も戻ってきたし、そろそろDクラスの頭を穫るとするか」

双方共に兵を引き、一時的な小康状態に入つてはいたが、回復試験組が復帰したことで雄二は決断した。

その言葉に試験を終わらせてきた秀吉がうなずく。

「そうじやな。ところで雄二よ。明久はどうしたのじや？ 姿が見えんが……」

「あいつは戦死だ。助けに来た夏目を庇つてな」

周囲を見回しそんなことを聞いてくる秀吉に、雄二はどうでも良さそうに答える。

それを聞いて秀吉はまづげをわざかに振るわせた。

「！？ そ、そうか。あ、綾香をのう……」

その様子に雄二は珍しいものを見たという風に片眉を跳ねさせた。それに気づいた秀吉がわざかににらむように雄二を見た。

「……なんじや？」

「いんや。秀吉が動搖するとは珍しいモンを見たなと思つてな」

「……ワシは動搖なぞしとらんぞい」

雄二の言葉を否定する秀吉だが、その口調には力がない。そのまま逃げるようすに雄二から離れていく秀吉を見送りつつ、雄二は嘆息した。

「（あの秀吉が、よりもよつて明久ともめ事か？ ）一いつちの作戦に響かなきや良いんだが……」

誰にも聞こえぬほど小さくつぶやく雄二。

それは、己に言い聞かせているかのよつでもあつた。

だい じゅうはちもんアルヨ

Dクラスとの決着をつけるためにFクラスの残存戦力すべてが出撃し、もぬけの殻となつた教室に綾香はひとりたたずんでいた。

雄二に気分が良くないと言つて、作戦から外して貰つたのだ。

最初は泣つていた雄二だが、瑞希の口添えもあつて、最終的には折れてくれた。

頬杖をついて、ぼんやりと外を眺める綾香。

その耳には、下校する生徒を利用したゲリラ戦を仕掛けるFクラスの面々の声がわずかながらに聞こえてはいたが、綾香自身にどうしてはどうでもよく感じられた。

と、ひとり大きな歓声が聞こえ、綾香の形の良い眉が小さく跳ねた。

「……勝ったんだ」

しかし、高揚感はない。その場にいないと言つの中もあるだらう。だが、それだけではない物足りなさが綾香をむしばむ。

次第に人のざわめきが教室に近づいてきたのに気づき、出入り口へ顔を向ける。

結構な人数の男子がぞろぞろとやつてきたのを見て田中君の顔を探す。

『あれ？ 夏田ちゃんだ』

『俺を待つていてくれたんだな』

『バカ言え、俺に決まっている』

『あの憂いを含んだ顔、きつと俺を心配して……』

『『『ないない』』』

『……デスコネー』

教室に残っていた金髪碧眼の少女を認めたバカ達が、口々に勝手なことを言つていいくが、綾香の耳を右から左へ抜けていった。

ふと、顔を上げて男子の一人に視線をあわせた。

「ねえ、新田君だけ？」

「は、ははははい！ 新田純一です！ シュ、趣味は……」

興奮した新田から視線を外しつつ、ただひとりを目線が探している。

「アッキーは？」

「……デスヨネー。はあ、吉井なら坂本の所へ行きましたよ」

「雄一の所？ ……ありがと」

新田の答えに訝しげになつた綾香は、お礼を言いつつ席を立つとそのまま教室から出ていつてしまつた。

そんな彼女の背中を、一同が見送つた。

「なに？ 明久だと？ 確かに補習室から解放されて真つ先にこつちへ來たが、先に教室へ戻つたはずだぞ？」

Dクラス代表と戦後交渉する雄一の元へやつてきた綾香が明久のことを見ねると、雄一は少し面倒そうに答えた。

「……そう」

その言葉に、綾香がちょっとびりしおれる。

その姿に、近くにいた秀吉が口を開いた。

「恐らく行き違ひじゃらうて、すぐに戻れば会えるかもしけんぞい」
言いながら慰めるように綾香の肩へ手を伸ばすが、その手が空を切つた。

綾香がいきなり秀吉に向き直つたからだ。

「うん。ありがと秀吉。また明日ね？」

そう言つて彼に笑いかけると、綾香はまた走り出した。

秀吉の手が所在無さげにさまよい、握りしめられる。

「……なるほど、夏田絡みか」

「？！…………何のことじや？」

雄一に言われて身を震わす秀吉。即座に取り繕つも、雄一の皿は誤魔化せなかつた。

「ポーカーフェイス、崩れてるぞ」

そう指摘してからDクラス代表の平賀に、タイミングは後で伝える。と言つて交渉を終わらせた。

「……綾香はの」

「ん？」

「綾香は、ワシをきちんと男として見てくれてこりのじや。その証拠に、先ほども手を空かされたのじや。知つておるか？ 綾香はあれでなかなか身持ちが硬いでな。男性が体に触れないよつこ氣を付けておるんじや」

「……いや」

「その事が嬉しくての。去年初めて会つたときから気になつておつた。そして田で追つよつになり、……返付いたら皆白しておつたのじや」

「おい……」

「いや、聞いて欲しいのじや。ワシのケジメのためにもの」
秀吉は泣きそうな顔で雄一に言ひ。

「普段なら軽い口調で断る綾香が真剣に考へて、答えてくれたのじや。そしてワシは振られた。初恋じやつた。じやからいじや、綾香と仲良つしておる明久を見ると妬むじや」

「……」

「分かつておるんじや。ワシが女々しへ思ひ立つておるだけじやといつことも」

ひとり喋り続ける秀吉の視界が揺らぐ。

「ダメじやのうワシは。いんだだから“性別・秀吉”などと言われるんじやろつのう」

握つた拳で顔を拭つ秀吉。その肩に雄一が手をおいた。

「そんなことねえよ秀吉。それだけお前が夏目の事に本氣だつたつて事だ。それなら明久を妬む気持ちだつて当然だ。お前は立派な男だよ秀吉」

「……はは、そう言ってくれるのはお主くらいじゃのう。ワシが女じやつたら惚れどるぞい」

「……勘弁してくれ」

目元赤くしながら冗談めかして言つ秀吉に、雄一はゲンナリとなる。それをみて秀吉が、「冗談じやよ」と笑つた。

「うむ、すつきりしたわい。聞いてもらつて良かつたのじや。すぐ

にわだかまりが消えるとも思えんが、前へと踏み出せそうじや」

「そいつは良かつた。んじや帰るとすつか」

晴れ晴れとした顔の秀吉に、雄一が笑いかける。

「心得た！」

それに応えて秀吉は笑つた。

だいじゅつをうむとでやな。

「クラスの戸を開けて、蒼い瞳が中を覗いた。

すでに、男子達は帰宅したようで、もぬけの殻……ではない。

ただ一人、ちゃぶ台に向かう人影。

柔らかそうなふわふわのピンクブロンドの少女がひとり。

「綾香ちゃん？」

「瑞希？」

思つてもみない人物に遭遇し、綾香は目をしばたかせる。

「どうしたんですか？」

「綾香ちゃん」

「瑞希！」

「私は少し疲れてしまつて」

苦笑いしながら答える瑞希。

無理もない。午後からふつ続けて四科田の試験を受け、せりには試召戦争。体力のない瑞希には酷だったはずだ。

「大丈夫？ 家まで送るつか？」

心配そうに言う綾香へ、瑞希は首を振った。

「ひと息ついていただけですから大丈夫ですよ それより、綾香ちゃんはどうしたんですか？ 誰かを探していたみたいですね？」

「え？ うん、アツキーをね」

そう答えて人差し指で頬を搔く。そんな綾香の様子に、瑞希は首を傾げる。

「……綾香ちゃん、明久君と何かあつたんですか？」

「へ？」

突然訊ねられてきよとんとなる綾香。その顔を見て、瑞希が小さく笑う。

「綾香ちゃんがこつやつて頬を搔くときは大抵なにかを誤魔化そうとしているときですよ」

言いながら頬を搔くまねをする瑞希を見、自身のほほにやられた指先に視線を流す。

「あ、あはは、瑞希にはお見通しかあ。まあちょっと喧嘩をね……」

苦笑い気味に言つ綾香を見て瑞希はわずかに驚いた表情をした。

「喧嘩……ですか？ 珍しいですね？」

言われて綾香は恥ずかしそうに頭を搔いた。

「ちょっと久々だったかも。でも、たぶんあたしが悪いのかなって漠然と思う位なんだよね。ねえ瑞希。なんでアツキーは試合戦争に入れ込んでるのかわかる？」

ついでとばかりに瑞希に訊ねる綾香。瑞希は目をしばたたかせ、

明久君がですか？ とつぶやく。

綾香がそれに頷くのを見て瑞希は軽く思案するように見せてからイタズラっぽく笑つて片手をつむつた。

「なあんて、綾香ちゃんなりもつ答えがわかってるはずですよ」

「……」

言われて面食らうが、すぐに笑顔になつた。

「ま、ね……アツキーが」

「明久君が」

綾香に合わせて瑞希も口を開く。

「一所懸命に」

「頑張るときは」

ふたりで瞑目し、同じ人を想つ。

「いつも誰かのため」

唱和しながら目を開けて互いを見る、綾香と瑞希。

そしてどちらともなく笑い出す。

「……うん、わかつてるんだ。アツキーが。明久がそういう奴だつてことくらい」

「ハイ」

視線を落としてつぶやく綾香に瑞希が返事をする。

「だから、いま、アイツにあって話がしたい」

綾香は少し照れくわいに言つ。それを聞いて瑞希は軽く頷いた。

「明久君ならさつさまでいましたよ？」

「ほんと？！　どこに行つたかわかる？」

「帰る支度をしてましたし、今頃昇降口じゃないかと思いますよ？」

急げば間に合います」

綾香にそう答える瑞希。

それを聞いて綾香は自分のちゃぶ台の下から荷物を引っ張りだした。

「ありがと瑞希　愛してるよ　」

「ふえっ？！」

教室から飛び出し際にそう言しながら、ワインクと投げキッスを飛ばす綾香。

瑞希はそれに面食らつてしまつ。

そのまま綾香を笑顔で送りだした瑞希だったが、窓の方に移動すると、グランンドに視線を落とした。

そこに広がるのは黄昏時の校庭。

人の姿もまばらな空間に視線を巡らす。

それが、校門のところにある長い影に止まつた。

瑞希には、それが“彼”だとわかつた。

ふいに、昇降口から茜色を反射して光るものが飛び出していく。それだけで、瑞希には“彼女”だとわかつた。九百人から在籍する生徒の中でもあれほど見事なものはない。

茜色を反射したそれが、長い影へ近づいていく。

立ち止まり、二つとなつた影がわずかに動く。

そして、二つの影が校門の向こうに消えるのを見ながら瑞希は優しく笑つた。

だい じゅうもんなのです

昇降口まで一気に駆け降り、周りを見回すも、求める影は見あたらない。

お互いの位置がわからないときは一人は動かず、もう一人が探す。ふたりの合流したいときの鉄則だ。

その際には、じつとしているのが苦手な綾香が探し、明久はなるべく綾香が見つけやすいところで待つ。これが一人のやり方。だから明久があちこち移動して捕まらない場合は、意味があることが多い。

そして、最後に綾香が必ず探すであろう場所へと彼は移動するのだ。

だからこそ。

綾香はそこへ視線を向ける。案の定、校門のところにたたずむ長い影を見て、綾香はすぐに“彼”だとわかった。

上靴をスニーカーに履き換え、校庭を一直線に“彼”に向けて走る。

「アツキー！」

名前を呼ばれ、明久が振り向いた。はにかむように笑う明久を見て、綾香は戸惑う。

「じゃあ買い物をして帰ろうか」

そう言つて歩きだそうとする彼に面食らいながらもうなづく綾香。

「え？ う、うん」

いつもなら並んで帰る道。

綾香は何となく気後れしてしまい、二歩後ろをついていく。

それから一人は終始無言だ。

綾香は切り出すタイミングを見計らいながらもなかなか言い出せずにいた。

そのままつかず離れずスーパーに入り、夕飯の買い物をする一人。交わされる言葉はなにを買うかideon。

買い物が終わり、家路に着くも、時間が経つてしまい、さらに切り出しつぶくなつた。

しかも綾香があれやこれや考へてる内に、明久の住む家族向けマシンションへとたどり着いてしまい、そのまま一人で玄関をくぐる。明久が、買い物袋を持ったまま台所へ入り、本日使う材料とそうでないものに分け、冷蔵庫にしまつていく。

その間に、綾香は買つてきた消耗品を、しまつていく。

これが一人の分担。普段の行動故に、そのまま作業をしてしまう。そして、いつもの流れで綾香は泊まりがけ用に置きっぱなしにしてある部屋着に着替えてしまい、明久の部屋と“泊まり用の自分の”部屋を簡単に掃除してしまつ。

ついでに「ミミをまとめながらマンガ類を片づけ、洗濯物を集める

綾香。

一方で明久は夕食の準備に取りかかつた。

明久が手慣れた様子で食事を準備する間、綾香は洗濯機に洗濯物を放り込んで洗濯。

そのままお風呂を掃除して湯張り。

そこまでやつてリビングに戻ると夕食ができていた。

「洗濯や掃除もやつちやつたの？ 別に良かつたのに」

「んー？ やりたかつたから」

明久の言葉に生返事を返す綾香。

そのまま夕餉が始まつた。

本日の夕食は、白飯に、豆腐の味噌汁。豚肉の生姜焼きに刻みキヤベツとプチトマト。そしてほうれん草のおひたしだ。

テレビのバラエティー番組をつけながら一人で夕食をとる。

その間……無言。

もはやどう切り出したら良いか、綾香にはわからなかつたし、明久もどうしたものかと頭を悩ませる。

結局、食べ終わるまで終始会話は無く、一人は食べたものの味もわからない始末だ。

綾香は洗い物は自分がやるからと明久を風呂へ追いやり洗い場に立つと……頭を抱えた。

「ど、どうしよー」

弱々しくつぶやくその姿には、いつもの快活さは無い。ともかくにも洗い物をすませてしまつ綾香。風呂から上がった明久に話そうと思っていると、明久がリビングにやつてきて一言。

「お風呂空いたよ綾香。入っちゃいなよ」

「あ、うん」

反射的に返事をしながら風呂場に向かい。脱衣所に入つたところで頭を抱えてへたり込んだ。

「そうじやないでしょ？！ あたし！？」

あーもー！ とばかりに頭を搔きむしり。少し頭を冷やそうと風呂に入る綾香。

風呂から上ると髪の水分を大雑把に取つただけで、ドライヤー片手にリビングへ向かう。するとソファで明久が待っていた。

そんな彼へ、「ん」。とドライヤーを渡す。

当然のようにそれを受け取る明久。

その隣に横向きに座つて、濡れて灯りを照り返す金糸をさりす。明久はそれを乾かし、手櫛で梳いていく。

この時間が綾香も明久も好きだ。

時を忘れて明久に髪を委ねる綾香。それを丁寧に手入れしていく明久。

一通り髪が乾くとそれなりの時間だった。

ふと、明日は補給試験があることを思い出し、一人で勉強を始めてしまった。

それが終わる頃には、夜中を回りそつた時間だった。

勉強道具を片づけた明久が、おやすみ。と言いながら自室へ入つていくのを眺め、綾香は口をへの字に結ぶと立ち上がつた。

明久がベッドで微睡んでいると、誰かが部屋に入ってきた。綾香だ。

そのまま明久のベッドまでやつてくると、するりと潜り込んできた。

幼い時分より互いの布団に潜り込むのが習慣化している一人には当たり前のことであり今更何といふこともない。

と。

突然明久は綾香の香りに包まれた。

綾香が背中から手を回して抱きついてきたからだ。

その手はわずかに強ばつていてことに明久は気付いた。

互いの体が接しているところが熱くなる。

そして、綾香は明久の背中に顔をうずめるようにしながら、「

…明久。ごめん」と、つぶやいた。

綾香が明久をきちんと名前で呼ぶときは真剣な時。これは一人の暗黙の了解だ。

そして、明久は彼女の手に自分の手を重ね、「……うん」と、漏らす。た。

ついで明久は、身をよじり、綾香の方を向いて、彼女を抱きしめた。

「…………僕も、ごめん」

明久の口からでた言葉に、綾香も「うん」と答える。

おでこをくつつけ、蒼い視線とコゲ茶の視線を絡まり合わせながら、二人で笑う。

お互い、相手のぬくもりを確かめるように抱きしめ合いながら、二人は眠りに落ちた。

翌朝。

明久は、なぜか床の上で目を覚ました。

だい ひじゅつもんなのです（後書き）

さて、いかがでしたか？
今回の二人は。

“喧嘩をしていて”

このレベルです（笑）

それでは、また次回

だい たまつにちせんですか

「みんな、おっはよー」

「クラスの戸を開け放ち、綾香が開口一番元気良くあいたつかる。それは、周囲を明るくし、皆に元気を『えのほどだ』。

「お？ 明久に夏田、今日は早いじゃないか」

「ふつふーん めーねー」

「まあ、今朝の綾香はすんなり起きたしね」

調子に乗つてふんぞり返る綾香の横で、明久は苦笑いを浮かべた。そこへ秀吉がやつてくる。

「お早うじや、明久に綾香よ」

「こやかに笑つて、『一人』に挨拶する秀吉。

その様子に明久と綾香が笑顔になる。

「うん、お早う秀吉」

「おっす 秀吉 今日も可愛いな

「やれやれ、それは男へのほめ言葉ではないぞい？ 綾香よ」

綾香に可愛いと言われ、苦笑いする秀吉。すると、綾香が顔をツイと近づけて、秀吉の胸を人差し指でつつつく。

「なに言つてるの。今時、男の子が可愛いのだつて十分ステータスだつて。秀吉は、もつとそれを武器にするべきかな？」

言いながら片手をつむった綾香に、秀吉は何も言はずに朱を散らす。

そのまま固まってしまった彼をおいて、綾香は明久へと向き直つた。

「行こ」

そういうと綾香は明久の手を取ると、自分のつやぶ台へと向かつた。

「おーい、秀吉ー」

「…………完全に固まっている」

動かない秀吉に、雄一と康太がのぞき込みながら肩を揺らすが、反応がなかつた。

「うー。疲れたよー……」

ちゃぶ台に上半身とあごを乗せ、両腕を前へ放り出しながら、綾香が呻く。

癖はあるが美しい金糸が広がり、ブレザーに包まれながらも、男達の夢が詰まつた大きな綾香のそれが、上に誰かが乗つかったバランスボールのようにひしゃげる。周囲の男子達はそれだけで後頭部を叩き始めた。

「あはは、おつかれさま」

そんな注目をされている綾香の後ろで苦笑いしながらひびつのは明久だ。

戦争では総合科目があつたため、補給試験もまんべんなく受けなければならない。

そのため、今日一日と明日の午前中で併せて十科目以上テストを受けなければならないのだ。

「くあー、腹減つたぜ。今田はラーメンとカツ丼とカレーとチャーハンにすっか」

軽く伸びをしてからそう言つて立ち上がる雄一を、綾香が半眼で眺める。

と、おもむろに口を開くと、「よく喰うねえ雄一は」

言つと雄一が首を「きききき」鳴らしながら「育ち盛りなんだよ」と、笑つてみせる。

それを見ながら綾香が身を起こし、立ち上がつた。

「行こうアッキー。腹減つたー」

少々元気のない調子で綾香が明久の袖を引っ張つた。

「……わかつたよ。姫路さん！」

綾香に答えつつ、明久が瑞希へ声をかけた。

「？　はい、なんでしょう？」

「ごめん、昨日の約束だけ、綾香に付き合わなきゃいけないから、また今度ね？」

「あ、そうなんですか？　残念です」

明久の言葉に瑞希は残念そうに眉をハの字にした。

そうして教室を後にする明久と綾香。

「どしたの？　瑞希となんか約束？」

聞きながら明久の腕を取り、下から見上げるように彼の顔をのぞき込んだ。

「うん、お弁当の味見をね」

「え？」

明久の返答に、綾香は声を裏返しながら目をむいた。

「み、瑞希のお弁当の？！　アツキー死ぬ気？！」

「だ、大丈夫だと思うけど……」

明久も自信はないのか言葉は尻すぼみになつていく。
「去年一緒にお弁当したとき、『にくじやが……中和が』とか言つていたし、直つてないんじゃないかな……」

そう言いつつ綾香が体を震わせる。

明久も綾香の言葉に遠い目となつた。

そして思い出されるのは中学の頃。

学校が別々だった瑞希は、明久とはなかなか会う機会がなかつたが、連絡を取り合っていた綾香のおかげで、たまたま予定が合つた三人は、ピクニックに出かけた。幼なじみ三人で遠慮無く楽しもうと計画したものだったが、瑞希がお弁当担当だったのが運の尽きた。

もはや食べ物ではないソレのおかげで三人とも倒れ、かなりやばいことになった。

一番頑丈な明久が、半死半生のままサバイバル知識を元に薬草などから解毒剤をそれこそ必死になつて完成させ、事なきを得た。

後でわかつたことだが、これがショックだったのか、瑞希はそのときのことまるで覚えてなかつた。その記憶が一人の脳裏によみがえり、そろつて震えた。

「か、考えるのはよそう」

「そうだね。今は普通にご飯を食べよつと

一人でうなづき、学食へと向かう。

だい ハジゅうにもんなのじや！

白い手で握られた箸が、少し大きめに切られたチキン南蛮を一切
れ摘み、それを口元へと運ぶ。

普段なら小さく上品に感じられる、形の良い唇がこれでもか！
とばかりに大きく開けられ、タルタルソースの付いたソレにかぶり
ついた。

「んぐむぐ……うんめーっ」

適宜に咀嚼し、チキンを味わう綾香。

金髪のお嬢様のような美少女然とした彼女だが、感覚は庶民的だ
し、普段から明久どじ飯の取り合い押しつけ合いばかりしていたせ
いか、上品ではない。

しかし、食事は楽しくおいしくを体現するかのような食べっぷり
は、かえって彼女の魅力になっていた。

そしてその隣に定食の乗ったトレーを持つて明久がやってきた。
それに気づいて手を止める綾香。

「アツキーはなんにしたの？」

「日替わり定食だよ」

着席しながらトレーを置きつつ答える明久。

綾香は、ふーん。と定食の内容を眺めていたが、とある一品を見
たとき、電撃が走った。

「あ、アツキー……、そ、それはまさかっ！…」

「うん、僕もちよつとびっくりした」

おののくように言つ綾香に、明久は苦笑い気味に返す。
綾香の言つそれとは……。

「カ、カニクリームコロッケじゃん！…」

そう、日替わり定食のめいんでいつしゅはメンチカツと一緒に乗つ
かつたカニクリームコロッケだった。

日替わり定食は、学食のおばちゃんがわりとてきとーに決めてい
るため、普段は存在しないメニューがある時があるのだ。

綾香の蒼い瞳は、そのキツネ色の衣に釘付けだ。

「む、ぐう。いくら何でも雄二じやないから定食一人前なんて無理
だし……な、なあアツキートレードしよう。チキン南蛮一切れやる
から、一個くれよ……いや、交換して下さい」

土下座せんばかりの勢いで明久に頬み込む綾香。その様子に明久
はやれやれと言わんばかりの顔になる。

「まあ良いけど……はい」

少し笑いながら箸でカーネクリームコロッケを摘むと、綾香へ差し
出す。すると綾香は蒼い瞳に を散らしながら喜び口を開けた。

「あーーん」

「……しうがないなあ綾香は」

ひな鳥が親鳥に餌を貰つように口を開けて待つ綾香に苦笑しつつ
明久はカーネクリームコロッケを彼女の口へ。

一個まるまるほおばる綾香。

ほつぺたをリストのように膨らませ、蒼い瞳を にしながら軽くじ
たんだを踏む。

「むぐ、むぐ、ふめーー」

まだ口の中に残っているにも関わらず、いかにもうまそうに興奮
氣味に言つ綾香。それを見て明久は笑顔になる。

「んぐ、んぐ、ふへー。ほんとにうまいぞこれ！ しかも冷凍もん
じゃなくて手作りだ！」

「え？ うそつ！？」

綾香の一言に、明久もあわててもう一つのカーネクリームコロッケ
にかぶりつく。

「……ほんとだ。しかもカーネの風味がすゞーーー」

「だろ？ じゅうどころは無駄にすゞいよな文月学園つて」

そう言いつつ白飯を搔き込み、味噌汁をすする綾香。

その様子に微笑みながら明久は綾香のお皿に箸をのばした。

「んじゃ、約束の一切れを……」

「ん？ そうだな。ホレ、あ～ん 」

明久が一切れ摘むより素早く皿を遠ざけつつ、半分かじったチキン南蛮を差し出してくる綾香。

「それ、半分かじつてあるよね」

「あ～ん 」

「約束は一切れのはずなんだけど？」

「あ～ん 」

「……」

「あ～ん 」

「……わかつたよ。あー」

けして譲らぬ綾香に嘆息しつつ口を開ける明久。そこへ綾香が南蛮を摘んだ箸をつつこみ、明久は口を閉じた。

ちゅふん。

と、明久の口から綾香が自分の箸が抜き取った。

「あ、南蛮もおいしい」

つぶやく明久に、彼女は二コ二コしながら食事に戻るうと、軽く箸の先つちょをしゃぶつてから次のチキン南蛮を箸で摘んだ。幼い頃より互いの口を付けたものを普通に食べさせあつたり、おやつの半分こなど日常茶飯事な一人にどつては、『ごく自然なこと』

もちろん、綾香に言わせれば、“まるまる一切れあげるより、半分になつたのを渡した方が損は少ない”という判断からの行動だが、周りの判断は異なるだろう。

と、綾香の隣に人影が現れた。

「……相変わらずね？ あなた達は」

と、言われ、綾香は『飯を口一杯に頬張つたままそちらを見上げ

た。

「ふあ。 ゆつふあ（あ。 ゆつか）」

「口の中に食べ物積めた状態でしゃべらないの。 相変わらず行儀が悪いんだから。 吉井君も久しぶり。 ここ、いいかしら？」

「久しぶり小山さん。 かまわないとと思うよ？」

友香に注意されて綾香が口の中のモノを必死で嚥下している間、明久と挨拶を交わした友香は明久とは綾香を挟んで反対の席に座る。テーブルに置いたトレーには、やはりサンドイッチとミルク。

「ング、 ング…… ふはあ。 ゆつか昨日振り

「仲直りできたみたいね？」

「うん ありがとねゆつか」

ほつぺにご飯粒ひとつ付けたまま笑顔でお礼を言つ綾香に、 友香も微笑んだ。

それから周囲を見回すと、一言漏らす。

「でも、 仲が良いのは分かるけど程々にね？」

見ればブラックコーヒーの注文や砂糖以外の調味料を追加していきる生徒が続出し、 あてられたカツプルがイチャつき始めていた。しかし、 当の明久や綾香は気づいておらず、 二人そろつて首を傾げており、 それを見た友香が嘆息した。

だいじょうぶねんもんであーる。

学食での昼食を終えた明久と綾香は、瑞希の弁当の味見をしているであろう屋上へと足を向けた。
なんというか、“知るもの”の責任”みたいなものを感じてしまつたからだ。

処刑台の十三階段を昇る面持ちで屋上への階段を上がり、死地へ赴く覚悟で屋上に続くドアを開けた。

そこに広がる光景は……。

青くなつて震える美波。

白目をむいて倒れる康太。

明らかに死相が浮いている雄一。

Hビフライをくわえたまま泡を吹いて転がる秀吉。

そして……何が起きているのか、いまいち理解していないっぽい笑顔で座る瑞希の姿があった。

惨憺たる有様である。

「一」、これは…… ゆ、雄一？」

表情をひきつらせ、絶句しながらもなんとか雄一へ声をかける明久。

「う？ あ、明久か？ よく見えん…… 花畠と川が……」

「駄目だ雄一！ その川を渡っちゃあ！！」

無事なように見えて、実は駄目らしかった。

「怖かったわ…… 怖かったのよお綾香あ～」

未だに震えの止まらない美波の頭を、よしよし。とばかりに撫でる綾香。

明久と軽く相談した結果、彼が注意するといつことで、瑞希を向こうへ連れていった。

その間、明久に一発貰つて正氣を取り戻した雄一は、康太の蘇生作業をしており、秀吉はといふと……。

「つ……なんじゃ？ ワシはいつたい……」

後頭部に柔らかい羽毛に包まれているかのような感触を感じながら、秀吉が目を覚ますと、蒼い瞳が上からのぞき込んできた。

「あ、秀吉、起きたー？」

「……は？」

綾香の声に、秀吉の思考が一瞬止まり、視界に存在する彼女の女の象徴の迫力に息を呑む。

そして気づいた。

今、自分が。

大好きな少女《綾香》に。

膝枕されていることに。

「……」

そこへ思考が至つた瞬間、秀吉は全身が石のようになり、真っ赤に染まった。

そして。

「のうつはああ～～～～つ？！（ブシャアアアア～～～！～！）」

康太もかくやと言つほどどの鼻血を噴出し、昏倒する秀吉。

「きやつ？！　ちょ、ちょっと？！　秀吉つ？！　だ、大丈夫なの？！」

突然のことには悲鳴を上げてしまつ綾香。

ついで秀吉を見ると、滝のよつた鼻血を垂れ流しつつ幸せそうに永眠しようとしているところだった。

「（我が生涯に、一片の悔い無しじや……）」

そのつぶやきは誰にも聞こえない。

それを見て綾香と美波があわてて秀吉の蘇生作業に入つた。

その様子を雄二と、意識を取り戻した康太がうろんげに眺める。

「……よく見とけムツツリーーー。あれが普段のお前だ」

「……断じて認めない（カタカタカタ）」

いまだ体の震えが止まらないながらも必死で否定する康太。

そんな騒ぎになつてゐるところへ、ずーんと落ち込みオーラをまとい、肩を落とした瑞希と、それを慰める明久がやってくる。

「……つう。私もうお料理やめます……」

「だから化学薬品混入さえやめれば大丈夫だからって……何事！？」

「き、木下君つ？！」

戻ってきた明久と瑞希は、血溜まりを作つて昏倒している秀吉を見て声を上げる。

秀吉の靈魂が手を振り天空へ還るひつとしているのを見て瑞希は決意した。

「……私、もう化学薬品使いません……」

これが後に、 “癒しの料理人”^{ヒーリングシェフ}と呼ばれるようになる世界的料理

人が最初に誓つた言葉だと言われた。

そんなトラブルは、まあ余談な訳だが、一同復活し、車座になつて座る。

「そう言えば坂本。次の目標はBクラスなの？」

美波がそう訊ねると、雄一は大きくうなづいた。

「ああそうだ」

それに対し、その場の全員が顔を見合させる。

「雄一、どうしてBクラスなのさ？ 目標はAクラスなんだろ？」

「……正直に言おう。どんな作戦でもうちの戦力じゃAクラスには勝てない」

明久の問いに、神妙そうな顔で言い切る雄一。

その雰囲気に一同息を呑む。

無理もないだろう。Aクラス上位十名は平均三百点オーバーの化け物ぞろいだ。学年一位の瑞希ならまだ何とかなるかもしけないが、綾香ですら得意の物理と数学以外では負ける公算が大きい。

そしてAクラス代表は第一学年最高成績者。

対抗できる手段は片手で数えられるし、下手をすれば代表一人でFクラスの生徒をほとんどせん滅できるだろう。

最後の一 手が打てない以上、勝つのは不可能に等しいのだ。

「んじや、狙うのはBクラスに変更なの？ 雄一」

少しまじめな様子で綾香が聞いてくるが、それに対しても首を振

つた。

「いや、Aクラスをやる。これに変更はない」力強く言う雄一にみなが困惑する。

「クラス単位じゃ無理だからな。一騎打ちに持ち込む。その交渉力ードにBクラスが必要なんだ」

「ははん。Bクラスに攻め込ますぞつて脅すつもりだろ。Aクラスは戦争に勝つても旨みがないから嫌がるだろ」

雄一の言にピンときたのか綾香がいつもの小悪魔スマイルを浮かべながら言うと、雄一も悪童らしく笑う。

「ああそうだ。Bの連中には設備をFに落とされたくなけりや言つことを聞けつて交渉する」

雄一の言葉を聞いて綾香はさらに笑みを深くした。この二人、すっかり悪人風である。

しかし、そこで明久が口を挟んだ。

「でも、一騎打ちで勝てるの？ 雄一」

「そこに関しては任せとおけ。勝算はある」

雄一は自信たっぷりに答えるが、明久は不安が拭えなかつた。

「なら良いけど……」

「とにかく、まずはBクラスだ。これをクリアーしなけりや次の段階には進めないからな」

雄一の言葉に、一同うなずいた。

だい はじめうんもんであります！

皆の反応にうなずいた雄一は明久の方を向いた。

「と、まあそういう訳だから明久」

「……なんだよ」

イイ笑顔の雄一に不思の目を向ける明久。しかし雄一はかまわずに続ける。

「とつととBクラスに宣戦布告してこい」

「断る。雄一が行けば良いだろ」

即答だった。

そんな明久の態度に雄一がため息をつく。

「……明久。またトラブルが起きるとでも思ってるのか？ Bクラスは上位クラスなんだからそんなことするわけ……」

「Bクラスの代表が、あの根本恭一でも？」

明久を言いくるめようとする雄一の言葉を遮るように、蒼い瞳の少女の声が響いた。

その内容に、明久と瑞希以外が驚く。

「……根本がBクラス代表だと？」

「そ。さつきゆっか……あたしの友達の小山友香に聞いたから確かだよ。ね？ アッキー」

少しつまらなそうに伸びをしながら明久に振る綾香。

その言葉に明久は力強くうなづく。

それを見た雄一は、顎に手を当てて考え始める。

「……その小山ってのは信用できるのか？」

「雄一のその問いに、今度は綾香の顔色が変わった。

「ちょっと雄一。あたしの親友を疑う気？ 確かにゆっかは恭一と付き合ってたけど、昨日別れたって言つてたし」

「根本と？ 物好きな女だな」

「……雄一。あんたね」

雄一の小馬鹿にしたような言いように、綾香の表情が険しくなる。先ほどまで意気投合していたとは思えないほど一人の空気が悪くなつていくのが手に取るように分かつた。

そこで明久が割つてはいる。

「ちょっと落ち着きなよ一人とも」

それによつて二人とも無言で矛を収めた。

「雄一、宣戦布告には僕が行つてくる。根本君がいるかどうかも確認してくる。それで良いでしょ？」

明久がそう提案すると、雄一がうなずく。

「ああ、そうしてくれると助かるな」

「……じゃああたしも行くよ」

明久の提案を呑んだ雄一の言葉に綾香が続いた。

これに焦つたのは雄一だ。

「いや、お前は……」

「問題ないでしょ？ “安全”なんだし。行こ？ アッキー」

だめだと言おうとした雄一の言葉にかぶせるように綾香が言い放

つ。

そして、さつと立ち上がりて屋上入り口へと歩き始めた。
それを見て明久が慌てる。

「ちょっと待つてよ綾香！ “ごめん雄一。綾香と一緒に行つてくるよ。けど、雄一も悪いんだよ？”

そう言いながら綾香を追いかける明久。

後には微妙な空気のままの五人が取り残された。

「綾香、綾香つてば！」

「なに？ アッキー」

明久に応じつつも足を止めない綾香。

「雄二にだつて立場があるんだから、許してあげなよ」

「……確かに、代表なんだし情報の真偽に過敏になるのはわかるけどさ……」

それでも綾香は友香を悪く言われたのが悔しかった。

一年Aクラスで一緒にクラスだった彼女は、最初こそツンケンして怒りっぽい感じだったが、綾香とつきあい始めてからカドが取れ、落ち着いた性格になつていった。

その頃には綾香とは親友と呼べるほど仲良くなつていた。

明久もそのことは知っていたし、綾香の気持ちも痛いほど分かった。その反面、雄二の言うことも分かる。

「雄二はさ、あれでもFクラスの責任者なんだよ。自覚があるかは微妙だけど、そういう责任感から出た言葉だつて思えないかな？」綾香になんとか分かつて貰おうと言葉を続ける明久。

それを聞いて綾香は小さく息を吐く。

そして明久の方へ振り向いた。

「……アツキー優しすぎ。まあ、そこがアツキーらしいけどね。ほら、行こ？」

そのまま明久の横にやつてきて、彼の手を取つて歩き始めた。

ところ変わつてBクラスの教室。

Aクラスほどでは無いものの、一般的な高校と比べれば、十一分にお金のかかっている設備の教室だ。

スライドドアが音もなく開き、ボリュームのある金髪と蒼い瞳の少女と、優しい雰囲気だが、どこかネジが一本足りなさそうな少年が入室してきた。

「しつつれーしまー」

「Bクラスの代表の方はおられますかー？」

Bの教室に足を踏み入れた綾香が元気良く挨拶し、明久が教室を

見回すようにしながらそれに続いた。

「あれ？ 綾香じゃない」

「ほんとだ。綾香久しぶり」

不意に声をかけられた綾香がそちらを見ると、一年の時同じクラスだった岩下律子と菊入真由美が小走りによつて来た。

「どうしたの綾香。遊びに来たの？」

「ていうか、クラスどこよ？ 遊びに行くわよ
にこやかにそう話しかけてくる律子と真由美に、綾香は少し困つたような顔になつた。

「いやあ、うちの教室はお勧めしないかな？ Fクラスだし」

『F？！』

綾香の答えに一人の驚愕が重なる。

「はあ、どうりであんな奴が代表の訳だ」

「あたし達、てつきり綾香がBクラス代表だと思つてたしね」

嘆息しつづげんなりしながら漏らす二人。

その様子に綾香と明久は顔を見合せた。

そして明久が一步踏み出し一人に声をかけた。

「えっと、岩下さんに菊入さん、久しぶり。それでBクラスの代表は？」

「あ、吉井君」

「相変わらず綾香と仲が良いのね？ で、代表だつけ」

「今呼ぶからちょっと待つてて？ 代表ー！」

律子が教室の奥へと呼びかけると、数人の取り巻きを引き連れた一人の男がやってきた。

ツヤのある髪をマッシュルームカットにして、アゴ先に少し鬚を伸ばした嫌らしい田つきの男。

卑怯卑劣で知れたこの男が、綾香と明久の前に現れた。

だい たじゅうじゅもんだぜえー？

「よお、夏田。俺の告白受けてくれる気になつたのか？」

開口一番そんなことを言つてくる根本に、綾香は顔をしかめた。
友香の話によれば、昨日のうちに話し合つて別れたらしが、そ
のこと 자체どうども思つていないようだ。

「……その話は何度も断つてるよね。あたし、しつこい入つて嫌い
なんだけど？」

根本の顔をにらみながら言つ綾香。だが、彼は動じた風でもない。
以前断つてにらんだときは明らかに怯んでいたが、今は余裕しや
くしゃくだ。

その差に綾香は違和感を覚えた。

と、その時明久が横から一步前に踏み出してきた。

「えつと、根本君がBクラスの代表なんだよね？」

「あん？ なんだゴミクズか」

話しかけた明久をゴミクズ扱いする根本。それと同時に取り巻き
どもが笑い出す。

その様子に律子と真由美はあからさまに嫌悪感を表し、綾香は顔
色を変えた。

「恭一！ あんたつ……！」

激高し、詰め寄ろうとする綾香を明久が制する。

「改めて、一年Fクラスの吉井明久です」

「ハツ。ゴミの分際で名乗りかよ」

「僕たちFクラスは、明日の午後の授業開始時刻を以て、Bクラス
に宣戦布告します！」

『…』

明久のその言葉に、根本のみならず、取り巻きも、律子も、真由
美も、Bクラスの全員が絶句した。

一瞬の沈黙の後、根本が肩を震わせ始める。

「…………ク、ククク……ハ、ハハハハ……アーッハツハツハツハツハ！
Fクラスが？ 僕たちBクラスに？ 何の冗談だ？」

爆笑しながら明久に訊ねる根本。

そのままズイッと顔を近づけ、笑みを消す。

「…………笑えねえな」

明久の目をのぞき込むように言う根本。だが、明久の表情は小搖るぎもしない。

根本はしばらく明久をにらみつけていたが明久は柔和に笑みを浮かべてみせる。

「…………そういう訳ですから。用件もすみましたし、僕たちは帰らせていただきますね？」

そう言つてきびすを返し、綾香へ、戻ろうか？ と声をかけて歩き出す明久。

だが、明久のその態度に、根本が頬肉を震わせる。

「余裕ぶってんじゃねえ！ やれ！ お前ら……！」

彼の叫びに取り巻きがふたり飛び出していく。

突き出された拳が明久の後頭部に迫り、激突……しなかつた。

腰を落としながら体を反転させ、相手の足下へと大きく一步踏み出す。

上体が伸びた相手の下に入り込んだ明久は、そのまま踏み込んだ足を踏ん張り、上体を上へと跳ね上げた。

ほとんど真上へと肩胛骨を叩きつけ、相手の体が宙を舞う。

「ガツハツ？！」

肺の中の空気をすべて吐き出し、重力と均衡した体が停止して落下する。

その下敷きにならぬよう、明久は素早く体をスライドさせた。

そして、その男は床へと落ち、悶絶する。

一方、もう一人は繰り出した拳を綾香にとられ、ひねりあげられながら額を床に着けていた。

瞬時に一人を制圧され、狼狽する根本。

しかし、すぐさま我を取り戻すと、残りの取り巻きにも攻撃を仕掛けさせる。

その数四人。明久と綾香はすぐさま思考を切り替えた。
綾香が視線をそらし、ドアの方へ振り向きながら「あ！ 鉄人先生！」と叫ぶ。

その名前が出ただけで四人の足が一瞬止まった。

その隙に明久と綾香は即座に飛び退いて走り出す。

根本らは啞然とそれを見送ってしまった。

「！ 鉄人なんざいないじやないか！ ボケつとすんな！」

いち早く正気に戻った根本が叫ぶが、時すでに遅し。明久と綾香

は脱兎の勢いで走り去った後だった。

「くそっ！ 吉井の奴め……まあ良い。切り札はこちらの手にあるんだ。これで夏目は……くつくつくつ」

だい たじゅうねんもんですの一

「そうか、根本はいたか……」

Bクラスへの宣戦布告を終えて戻ってきた明久達の話を聞き、雄一は顎に手を当てながら考える。

その態度に綾香はムツとなる。

「それだけ？ ほかにも言うことあるでしょ？」

「……わてな。なんかあつたか？」

綾香に言われるもとぼける雄一。それを見て明久は顔をしかめた。

「……雄一、あんたね」

「後にしてくれ。作戦を補正しなきゃならん」
詰め寄ろうとする綾香を避けて行こうとする雄一。綾香がその手を素早く取る。

そして一瞬の間を置いて自分の胸に雄一の手をくっつけた。
その行動に雄一は大いに慌てた。

「な、なにやつてんだお前はつ！」

「きやー雄一があたしの胸触つたー」

「は、はあつ？！ な、なに言つてやがるつー…？」

「いやー揉みしだいたー」

「てめえ、いい加減に……ハツ？！」

棒読みながらも騒ぐ綾香に抗議する雄一だったが、周囲に膨れ上
がつた殺気に気づく。

「……雄一。お主良い度胸じゃ のう」

『綾香ちゃんの胸を揉みしだくなど、羨ま……万死に値する…』

『この「リラが。調子にのつてんじゃ ねーぞ…』

「クラス男子の押さえきれない嫉妬と殺意を一身に受け、雄一は
後ずさる。

「ま、までお前ら。これは夏目が勝手にやつたことだ……」

「問答無用じゃ…」

『坂本を殺せえ——つつ——』

「チキシヨー！！！俺がなにをしたーつ！！！」

綾香の手を振り払つて逃げ出す雄一。それを追跡する覆面の集団。デスマニアスが始まった。

「ざまみろアホ雄一」

綾香は走つていく雄一の背に向けて舌を出しながら胸元を手で払つた。

結局、雄一と彼を追跡していた秀吉以下Fクラスの男子達は鉄人に捕まり、補習室で補給試験を受けつつ、休み時間と試験終了後に補習を受ける羽目になつたらしい。

教室で午後のテストを受けたのは明久、綾香、瑞希、美波のたつた四人だった。

終わりのHRもその四人だけで、その後の清掃が少し大変だったが他には問題ないようだった。

校門を出たところで、用事があるというほかの二人と別れ、家路につく明久と綾香。

「つたく。雄一があんなアホだと思わなかつたよ」

「雄一は誰かに頭を下げるのが嫌いだからね」

ブツクサ言う綾香に明久が苦笑い気味に答える。

「まい—や。仕返しもしたし、溜飲を下げてやろう

「あはは……でも、ああいうのはやめた方が良いよ？　その、さわらせるとか」

えらそうにふんぞり返る綾香を明久がたしなめる。

すると綾香は不思議そうにしながら明久の方を見て笑う。

「なーに？ アッキー。 ヤキモチ？ ブラの上に手をつけただけだよ？ 減るわけでも無し……」

「またそんなこと言つて……」

楽しそうな綾香に明久は嘆息した。

それをのぞき込む綾香。 そして楽しげに笑い、 学生鞄を後ろ手に持ちながら一步、 二歩と後ろへ跳んだ。

「……なーによ。 もしかしてイヤだつたとか？ ナビアッキーは直揉みしたことだつてあ……」

ニヤニヤとあの小悪魔スマイルを浮かべながら明久を見る綾香。それに対しても明久は少し視線を外した。

「別に…… そんなこと……」

言いよどむ彼に綾香は少し不思議そうな顔になつたが、 やがて小さく笑うながらくるりと向こうを向いて歩き出す。

黄昏時の陽に照らされながら一人そろつて無言でしばし歩く。不意に綾香の足が止まつた。

「あ！ そーだつ！」

「な、なに」

突然大きな声を出した綾香に、 明久も驚いて足を止める。

軽く一步跳んで、 着地と同時にターン。

長い金髪が、 茜色の光を受けて輝きながら、 スカートとともに広がる。

「プリン」

「へつ？」

綾香の言葉に、 明久は一瞬反応できない。

「だから、 プリンよ。 プ・リ・ン。 昨日買わなかつたじゃない」

「あ。 そう言えばそうだね」

「よし！ 今から買いに行こ！」

そう言つて明久の元へ小走りに走りよると、 その手を取つて引つ張り出す。

明久が、わかつたよ。と、苦笑いしながら応じて歩きだすと、綾香は彼の腕に自分の腕を絡めた。

一人で歩く黄昏時の道。彼らの足下から伸びる影は、ひとつだ。

だい じゅうななもんやな。

軽い買い物の後、明久と綾香はとある一戸建ての前に着ていた。表札には『夏田』とある。

「たつだいま」

玄関の鍵を開け、スキップするように三和土へ靴を脱ぎ散らかしながら入っていく綾香。

「ただいま」

それに続いて明久が玄関をくぐり、綾香の靴を揃えてから自分の靴を脱いであがる。

家中から反応がないことを感じつつリビングへ向かった明久は、すでにソファでくつろぐ体勢の綾香へ声をかける。

「アンナはやつぱり虎吉おじさんについていたの？」

「うん。パパもママも今頃ドイツかなー？ 学会とかで四月の終わりくらいまで向こうだつてさ。筋肉バカのクセになにを発表するんだか」

明久に答えてテレビの電源を入れる綾香。彼女の答えに明久は苦笑いしながらキッchinへ。

「……まあ虎吉おじさんの趣味や経歴考えると、数学者って感じはしないよね」

「大学卒業と同時に、フランスへ。なにを間違えたのか外人部隊に所属して戦場へ。除隊してからは数学者としての名前が多少売れて今に至ると。で、趣味は体を鍛えること。小学校の作文で本気で悩んだよ」

ソファから立ち上がり、自分もキッchinへ。そのまま“一人の”マグカップを出してインスタントコーヒーを入れる綾香。

「あれ？ 豆もう無いの？」

「パパのオリジナルブレンドだからね。こないだ使い切っちゃった」

明久の問いに肩をすくめる。それに苦笑いを返してリビングにプリンとスプーンを運ぶ明久。続いて二人分の「コーヒー」を綾香が運んできて二人並んで座るとお茶会が始まった。

「ん~ プリンうまうま~」

「そうだね」

銀色のスプーンでプリンを掬つて口にする綾香。

顔いっぱいにおいしいといつ気持ちをみなぎらせながら味わつていぐ。

綾香のプリンはミルクプリン。そして明久は上にモンブランの乗つたプリンだ。

お互い半分ほどに減つたところで綾香は自分のプリンを掬つて明久に差し出した。

「ほいアッキー。こっちも食べてみなよ~」

「ん? あーむ。へえ、ミルクの柔らかい味わいが良いね」

差し出されたスプーンをくわえ、明久はミルクプリンを味わう。そんな明久を見ながら綾香は抜き取ったスプーンをしゃぶつて、明久のプリンへ蒼い視線を向けた。

「じゃあ次はそっちのちょーだい あーん」

「しかたないなあ」

明久は苦笑いしながら、モンブランとクリーム、そしてプリンにカラメルを絡めながらスプーンに掬つて綾香に差し出した。

それをパクつきおいしそうに味わう。

そんな風にお茶会の時間は過ぎていった。

本日の夕食は綾香のお手製オムライス。

パエリアを知る以前の明久の大好物だったこともあり、当時まだ小学生だった綾香はかなり練習した一品だ。少々焦げてるのがご愛嬌だが。

それに舌鼓を打ちつつ、一人で夕餉を楽しんだ。

食事も終わり、二人で片づけ、一緒に洗い場に立つ。

「今日、泊まつていいくでしょ？」

「うーん、今から帰るのも面倒だしね。そうしようかな？」

並んで洗い物をしながらそんなことを話す。

「じゃあアツキー先にお風呂しちゃいなよ。それとも……何年かぶりに一緒にに入る？」

小悪魔スマイルを浮かべ、隣の明久へ腰をぶつけてくる綾香。

「……さすがにお互い高校生でそれは無いっしょ」

「だよねー　あー。でも久しぶりにアツキーの象さん見たかったかも？　あれが羨ましくってさあ、取れないかどうか色々してたらペローヌつて剥……」

「ハイ！　下ネタ禁止！」

綾香の暴走トークを遮る明久。しかし、綾香はその反応を面白がる。

「今更恥ずかしげること無いじゃん　わりと全部見せ合つてるし」

「全部小学校低学年の時の話でしょっ！」

やや焦り気味に言う明久。

何か、そう言つておかないと非常にマズい気がしたからだ。

「ちえー。つまんねーの」

明久のノリが悪くて唇をとんがらかせる綾香。

そのまま洗い物が終わって、明久を先にお風呂へ追いやり、自室を少し片付ける。

それが終わった頃には明久が風呂から上がり、綾香とタッチ。

その後は髪の手入れタイムだ。

「……明日はBクラスと対決だね」

「午前中には補給試験があるけどね」

髪を丁寧に手櫛で梳していく明久と明日のことを話す綾香。

「まあ、テストはこの後の予習復習で対処すれば良いけど……」

「……根本君だね」

「……うん」

根本恭一は学園内でも良くない噂の多い男子だ。カンニングの常習犯、競争相手に下剤を仕込む、あげくは喧嘩に刃物だ。

「……まあ、雄一がそつそつ後れをとるとは思えないけどね」

小さく息を吐きながらつぶやく綾香。

「そうだね。むしろ、僕らひとりひとりに何か仕掛けてこないかを気をつけないとね。ハイ終わり」

「そうね。ありがと アツキー」

髪の手入れが終わり、明久に笑顔でお礼を言つ綾香。その後ふたりで軽く勉強してから、綾香にせがまれ、彼女のベッドで一緒に寝た。

翌朝、やはり明久は床の上で目を覚ました。

一方そのころ。

「……これで良かつたのでしょうか?」

一枚の写真を前に、燈色の髪をドリルツインテにした少女がため息をついた。

昨日の騒動で、怨敵とも言つべき吉井明久に復讐せんと、学年のクズの口車に乗ってしまった。

そして、決定的な瞬間が撮れてしまった。

約束した以上写真の一枚は手渡してしまったが、さらに要求された元データはもう無いと誤魔化したもののは罪悪感は消えない。

彼女と仲が悪いわけではないのだ。ただ、吉井明久を処刑しようとすると、邪魔をしてくる。不満はその一点のみ。

だからこそ。

この写真を撮り、あのクズ豚に渡してしまったことを、少女、清

水美春は後悔していた。

だい じゅうはいちもんだよん

「さて皆、補給テスト」)苦勞だった」

『…………』

教壇に立つた雄一が教卓に手を置いて皆に向かって言つたが、クラスの反応はいまいちだった。

「……午後はBクラスとの試合戦争に突入する予定だが、殺る気は十分か?」

『…………』

雄一の言葉にも反応は微妙。

これには彼も苦虫を噛み潰したような顔になつた。
少し思案し、ちゃぶ台に寝そべるよつよつとした綾香へ顔を向ける。

「…………夏田」

「んー? あによー雄一」

返事はすれども顔は向けない。

それに構うことなく言葉を続ける雄一。

「昨日は俺が悪かった。許してくれ」

「……それは、何に対する謝罪?」

頭を下げて謝る雄一に綾香は蒼い瞳をジト目にながら雄一を見、そう訊ねる。

「……お前の友人をバカにして悪かった」

頭を下げながらしかめつ面になりつつも今一度謝罪する。

「……はあ。今度同じ事したら許さないからね」

「…………わかつた」

降参だと言わんばかりの表情で顔を上げる。
すると、綾香が勢い良く立ち上がった。

「さあみんな これからBクラスとの試合戦争だよ 殺る気は

OK?』

『イエアアーッ!!』

先ほどの静けさとはうつて代わって大盛り上がりするそこで綾香が雄二の方を向いて目配せする。

すると男子どもが一斉に雄二の方を向いた。

「今回の戦闘は、敵を相手の教室の中へ押し込むことが最重要だ。従つて開戦直後の渡り廊下戦は、絶対に負けるわけにはいかない」

「だ、そうよ」

『おおーっ!!』

「そこで前線部隊は姫路瑞希に指揮を執つてもらい、その補佐役として、夏田綾香、吉井明久を任命する。野郎ども!! きつちり死んできやがれ!!」

雄二の言葉でクラスの綺麗どころである瑞希や綾香と一緒に戦えると知つた前線部隊メンバーの意氣が上がつた。

「が、頑張ります」

「みんな、よろしく~」

「……まあ、僕はおまけだよね」

握り拳を作つた両を胸につけるようにしながら意気込む瑞希に、右の人差し指と中指をそろえた敬礼しながらウインクする綾香。ついでに明久も一步前に出る。

その様子に、前線部隊の士気は最高潮に達していた。

今回の戦いに置いて重要なステップでもある渡り廊下戦。

ここを確実に獲るために、全戦力の八割に、一枚看板『瑞希と綾香』を投入するようだ。

高いモチベーションに主力の一枚看板。渡り廊下戦は獲つたも同然だろう。

キーンコーンカーンコーン

昼休みの終了を告げる鐘が鳴り響き、それが開戦の合図となる。

「よし、行つてこい！ 目指すはシステムディスクだ！」

『サー、イエッサー！』

最後には威儀を取り戻したのか、雄二の指示に男子は従つていて、その勢いを笠に着て、Fクラス前衛部隊は廊下を駆けた。

そのなかを綾香と明久は走り抜けた。

最強の存在である瑞希は、運動が苦手なため、先に綾香達が前線を構築しようと急いで前進したのだ。

おかげでふたりは一番乗りだ。

そこへBクラスの生徒が十人ほど並んで歩いてきていた。

その後ろには、総合科目勝負を承認できる、学年主任の高橋教諭の姿。

「これは、最初からクライマックスかな？」綾香

「ふふん 上等よん 一気に行くわよアッキーフ！」

「了解だよ綾香！ 長谷川先生！ 吉井明久と！」

「夏目綾香が！」

「Bクラスに数学勝負を申し込みます！！」「

「承認します！」

ふたりに応え、長谷川教諭がフィールドを展開する。

通常のものより広いそれは、Bクラスの生徒を五人ばかり巻き込みながら展開された。

「試験召喚！！！」
『サモン

明久と綾香が、異口同音に言霊を紡ぐ。すると、大型の魔法陣が展開し、ふたりの召喚獣が召喚された。

それを見てBクラスのふたり、岩下律子と菊入真由美がひきつたような声を出す。

「あ、綾香と数学勝負なんて……」
「か、勝てっこないじゃ……」

綾香の友人で、その成績を知るふたりが絶望に打ちひしがれるのを不思議そうに見ながら、他の三人も召喚獣を召喚した。

「なにやつてんだ？ 岩下に菊入。最下層のFクラスのふたりなんて壁にすらならないだろ？ さつさ倒して奴らの前衛に備えるぞ！」

一人がそう声を上げるのに合わせ、他のふたりはうなずいた。

一方、律子と真由美は、召喚フィール内で勝負を挑まれたら召喚獣を出さないと敵前逃亡したとして戦死扱いになってしまふため、あわてて召喚獣を呼び出す。

そして、点数が表示された。

『Bクラス 数学 野中長男171 金田一祐子159 里井真由子156 岩下律子209 菊入真由美171 VS Fクラス 吉井明久71 夏目綾香521』

「「「500点オーバー？！」」

「「「ですよねー」」

綾香の点数に、三人が驚愕し、律子と真由美が肩を落とす。

その隙をついて綾香は召喚獣に柳葉刀を投げさせた。ついでステップを踏んで踊り出す。

それに合わせて召喚獣もステップを踏み出し始め同時に腕輪が輝く。

すると、綾香の召喚獣の姿がブレ始めた。長い紐の先の柳葉刀もその輪郭をブレさせ七本ずつに分かれた。

その頃には綾香の召喚獣自体が七体に分身しており、ステップを踏む。

広いフィールドの中を、綾香の舞に合わせて十四の飛刀が舞う。

それは一つの軌道をなぞる動きだが、分身の出現タイミングのズレによつて軌道をなぞるタイミングが違う。一刀目二刀目をかわしても三刀目四刀目が迫り、それをしのいでも五刀目六刀目にくわえ、一刀目が襲いかかつてくる。

絶え間無く襲いかかつてくる刃を、操作に慣れない者が捌ききれ
るわけもなく、為す術もなく切り刻まれていく。

フィールド内は、死の舞踊ダンスマカウルの嵐のようだ。

そんな中ですら、明久の召喚獣は無人の野を行くが如く駆ける。
何とか凌いだ相手に止めを刺し、綾香に近づこうとする者を排除
する。

フィールド内は、まさにふたりきりの独演会。

美しいまでの殺戮の嵐によつて、Bクラスの五人は戦死してしま
い、残る五人もひるんだ。

そこへ続々と到着するFクラス前衛部隊。遅れて瑞希も到着する。
戦いは、Fクラスが有利な形で始まった。

だい たじゅつせきうもん……だと？

Bクラス先発隊の出鼻をくじいた明久と綾香。だが、Bクラス代表の根本の事もあり、戦況が有利なうちに教室の様子見に行く人員を選抜した。

明久、秀吉をはじめとした数人が前線から離れていく。
一方で前線を任せられた綾香と瑞希。作戦の要ともいうべき瑞希を消耗させすぎないよう雄二に言い含められていた綾香は、必然的に矢面に立っていた。

だがそこで困ったことが起きていた。

『綾香ちゃんはこの君島が守る！』

『いやいやいや、この肉壁近藤こそが綾香ちゃんを守るにふさわしい！』

『バカを言つなこのオレ！ 朝倉こそが綾香ちゃんの騎士にふさわしい！』

綾香が戦闘を開始すると、Fクラスの面々が乱入してくるのだ。

綾香はこれに辟易した。

綾香の召喚獣の武器は、効果範囲が広い一対多で真価を發揮する武器だ。

武器だ。

反面、乱戦では使い難い。

ウロウロしている味方を避けて投げられる程操作に熟達はないし、中途半端な舞では威力が出せないばかりか、武器を破壊されてしまう可能性もある。

隣に立つのが明久なら良い。

明久なら、“当たるわけがない”と確信できるから。

しかし、他の人間の操る召喚獣では、当たってしまうかもしだい。

その思いが、綾香の動きを萎縮させていた。

だが、Fクラス男子たちにはそんなことを感じ取れるはずもなく、綾香に良いところを見せようと突撃し、返り討ちに合ひう者が続出。かえつて綾香がフォローしなければならない局面が増えてしまい、召喚獣はみるみる消耗していった。

「ああ、もう！」

いらつきを隠せず、召喚獣に一本の柳葉刀を振らせる。

消耗したとはいえ、数学ならばいまだ243点の点数を誇る綾香の召喚獣に対し、150点程度のBクラス召喚獣がかなうわけもない。

流麗に振られた二刀は、片方で相手の剣を弾き、もう片方が胴をなぎ払う。

その一撃だけで光に還る敵召喚獣。

しかし、その隙を突いて二体が追加される。

「綾香ちゃん！」

「瑞希ダメ！」

思わず足を踏み出した瑞希を鋭く制する綾香。

「瑞希まで消耗したら、後の作戦に響きかねないから…」ここは我慢して！

「ここまで瑞希は指令官役に徹していたため、消耗はない。

ある種、その場にいるだけで相手に対してプレッシャーを与えるには瑞希が控えているという安心感を与える優秀な戦力でもあるのだ。

もし投入するにしても効果的、かつ決定的な場面で投入しなければ、無駄な消耗を招いてしまう。

「ここを任せている以上、綾香はそれだけはしたくなかった。

迫るメイスを蹴り逸らし、グラディウスを左の柳葉刀で弾きながら右手の刃で胸板を貫く。

体勢を崩したところへ再度メイスが迫り、綾香の召喚獣の左肩へ叩き込まれる。

そのままはね飛ばされつつ、右の柳葉刀を投擲。見事相手召喚獣

の顔面に突き刺さり、光へ帰す。

点数は182点まで下がつてしまつたが、綾香の意志は衰えない。そんな彼女をBクラス陣営は突破できずについた。

長谷川教諭の範囲の広い召喚フィールドで渡り廊下から中央階段までをカバーしているため、迂回が難しいのだ。

すでに綾香一人のために、Bクラスの先陣、中堅、併せて十人以上が戦死させられ、それに倍する人数が数学の点数を削り取られた。

逆に、Fクラスの戦死者は片手で数えられる程度だ。

これも綾香の奮闘によるものである。

こうして前線に出ているBクラス生徒の数も減り、綾香は周囲に指示して一気に押し込む準備を始めた。瑞希の火力で残りの戦力に大打撃を与える、潰走したところを追撃し、Bクラス戦力をさらに暫減するつもりなのだ。

しかし、そこでトラブルが起きてしまう。

『お前らそこで止まれ！』

『さもなきやこいつに止めを刺すぞ！』

そんな声が響きわたり、Fクラスの面々が動きを止めた。

見れば英語Wのフィールドに、Bクラスの男子が二人と……。

「美波ちゃんつ？！」

瑞希が声を上げ、綾香が、あちゃー。とばかりに顔を右手で覆つた。そこにはBクラス男子のそばにへたり込んだ美波と戦死寸前まで削られ、武器を失い、刃を突きつけられた彼女の召喚獣の姿があつた。

だいさんじゅうもんでがんす。

膠着状態に陥り、ほかのBクラス生徒は撤退を開始し始めた。それを見た綾香が指示を出そと口を開いたとき、従弟の声が聞こえてきた。

「綾香！ なにがあつたの？」

「アツキー！ そつちは大丈夫だったの？」

足早に綾香へ近づく明久へ、彼女は驚きとともに問いかけた。

「なかなかやつてくれるよ根本君は。教室設備を破壊されたよ」明久の言葉に綾香が顔をしかめる。

「相手の補給を断つ作戦ね？ 常套手段ではあるし、効果的ね」

「うん。けど、やり方が半端だったからね。リカバリーは容易だよ。それより……」

言葉を切つて前を見る。

視線の先にいるのは優位に立つて得意げなBクラスの一人と、あきらめたかのように消沈する美波。

そして撤収を完了しつつあるBクラスの残存戦力。

「参ったね。追撃はもう無理そうだ」

「うん。出来れば残りも掃討しちゃいたかつたんだけどね」ため息をつく明久に、綾香がうなずく。

「十六時には一時休戦になつて、試召戦争に関するすべての行為が禁止になるから、その前になんとかしないと、回復試験も受けられなくなっちゃうんだよね」

「え？ そうなのアツキー」

驚く綾香に明久はうなずいてみせる。

それを見た綾香が思案顔になつた。

「うーん、追撃戦後に数学の回復試験受けるつもりだったのに。それじゃあ余計に時間掛けらんないわね。仕方ない」

「……島田さん、怒りそつだなあ……」

向こうで美波を人質に取つたまま、がなり立てているBクラス男

子を見やり、明久は嘆息した。

それを横目で見ながら綾香が苦笑いする。

「ま、一発くらい殴られておきなさい」

「……そうしとくよ……」

彼女に肩をぽんぽんと叩かれながら肩を落とす明久。気合いを入れ直し、顔を上げると前へ進み出た。

「島田さん！」

「よ、吉井！」

明久に声をかけられ、美波が珍しくしおらしい声を上げ、Bクラスの二人が身構えた。

「Bクラスの一人とも、島田さんを放すんだ。それが君たちのためである」

「なに言つてやがるんだ？」

「バカの言つことなんかに耳を貸すんじゃない」

明久の話に耳を貸さうとしない一人。しかし、明久は話を続ける。「君たちの命のためなんだ！……」

「！？」

明久の言葉に、一人がビクリと肩を震わせる。

「いいかよく聞くんだ。君たちが人質にしたソイツは、ただの女子じゃない。その一撃は岩をも碎き、巨木すらへし折る慮力を誇る魔人、『シマーダミイナミイ』と呼ばれる怪物なんだ！」

明久の突然の言葉に、美波もBクラスの二人も呆気にとられる。

そしてその後も明久によつて、美波がどれだけ恐ろしいかの説明が続いた。

そこまで言われて彼女が黙つてるわけがない。

「よし、あんたねえつ！『瑞希のパンツを見て鼻血が止まらなくなつて保健室にかつぎ込まれた』って聞いて心配してやつ

たのに、なによその言いぐさはっ！？」

憤怒の形相ですさまじいまでのドス黒いオーラを放ち始める美波。その様子にBクラスの一人はビビり始め、ドン引き状態だ。

しかし、明久の方も。

「あ、明久君！？ ほんとに私のパンツ見たんですかっ？！」 答えてくださいっ！！」

と、涙目な瑞希に詰め寄っていた。

そんな喧噪の中、綾香は須川と新田を連れて、少しづつ移動していた。

数学のフィールドからそつと英語Wのフィールドへ移り、タイミングを計る。

そして、美波の放つ殺気に当たられ、Bクラスの一人が怯んだ瞬間、行動に移った。

「サモン召喚」

言靈が響き、ディフォルメ綾香が召喚獣が顕現すると同時に一本の柳葉刀を投擲した。

横合いから現れた召喚獣の姿に驚くBクラスのふたり。その瞬間、柳葉刀が美波の召喚獣に剣を突きつけていたBクラス召喚獣の胴体へと一本が突き刺さり、もう一本は外れた。

素早くそれを、紐を引いて回収しつつ、もう一体の召喚獣へドロップキックをかました。

一体は光へ還り、もう一体は吹き飛ばされた。

「な、なんだとっ！？」

「くそつ！？」

吹き飛ばされた方は戦死しなかつたが、綾香に続いて召喚した須川と新田の一人掛かりでどごめを刺していた。

「ふう……」

戦死したBクラスの一人が補習教師に連れて行かれるのを眺める
がら明久は息を吐いた。

そこへ長く癖のある金髪を揺らしながら綾香がやつってきた。

「お疲れ」

「なんとかなつたね」

綾香のねぎらいに、苦笑い氣味に応じる明久。その背後に怒れる
猛虎が現れた。

その気配に、明久の顔から滝のように汗が噴き出した。

「……よ～し～い～」

地獄の底から響きわたるような声に明久は身動き一つ取れない。
その肩に彼女の細い指がかかり、食い込んでいく。

「し、島田さん、ぶ、無事で良かつたよ」

後ろを振り返る余裕すらなく、明久がそう言つと、肩に食い込む
指の力がいつそう強まつた。

「吉井！ よくもウチを化け物呼ばわりしてくれたわねっ！ また。
彼女にしたくないランキンギングが上がっちゃうでしょっ！！ どうし
てくれるんのよっ！！」

「いや、あれは作戦……」

「問答無用！ 齒を食いしばりなさいっ！」

明久の肩を引っ張つて振り向かせると、渾身の力を込めて右スト
レートを放つた。

だい さんじゅうこひもざれも。

「ぐつ？！」

迫る拳を明久は避けよつともせざ甘んじて受けた。

そして美波がもう一発とばかりに振りかぶった腕を、ほつそりとした白い指が捕らえ、第一撃を防いだ。

それは、長くて癖のある金髪の少女の指。

「離しなさいよー 綾香！ ウチは吉井をボコらないと気が済まないのよー！」

そんな彼女に美波は吠える。

「落ち着きなさいよ美波。戦死しないで済んだんだから良いじゃない」

「冗談じゃないわよ！ 何であそこまで言われなきやならないのよ！ ウチだって女の子なんだからね！？」

そう叫ぶ美波の姿に、綾香は空いてる右手で頭を搔く。

「そりや普段からアツキーをボコるつとしてんだから当たり前じゃない？ それに、あれは美波を助けるためにアツキーがその場ででっち上げた話だよ。まあ、美波を怒らせて相手の注意を逸らすためでもあつたけど。大体あんな嘘に引っかかるて敵に捕まつて、みんなの足を引っ張つた上に助けてもらつておきながら謝罪も礼も無しで殴りかかるつてどうなのよ」

「う、ぐつ」

綾香に指摘され言葉に詰まる美波。頭に上つていた血も下がり始めたようだ。

「後ね、どうしてもアツキーをもう一発殴りたいなら、まずあたしをぶん殴つてくれない？ 美波を怒らせるのにはあたしも同意したようなもんだし」

明久が美波を怒らせる話で相手の注意を逸らすのは分かつていた。

プロの交渉人や話術に優れているわけでもない一介の高校生の半端な交渉では二人同時に注意を逸らすのは難しい。

それゆえに明久は美波にも怒つて貰うこととどちらにも注意を引かせるためになんか話をしたのだ。

綾香もそれを察していたが、Fクラスで射程のある攻撃を繰り出せるのは自分くらいしか居ないため、交渉を明久に任せたのだ。相談せずとも、互いのやることが分かつていてこそその分担だ。

「綾香、それは……」

殴られて顔の一部を赤くした明久が声を上げる。

「いいの。あたしもアツキーと一緒に殴られるつもりだったんだから。けど美波」

「……なによ」

「殴った後で良いから、みんなに迷惑を掛けたことを謝つて、助けて貰つたことに礼を言いなさいよ？」

そう言われて、肩を落とす美波。

「……もう……いいわよ……」

顔を逸らしながらつぶやくように言つ。そして、一度顔を上げ、頭を下げる。

「みんな、迷惑をかけてゴメン！ それから……助けてくれてありがとう！」

謝罪と礼を口にする美波。

それに対して、クラスメイトたちは笑顔で応じる。

そのことにホッとした明久の方を見る美波。

「よし……」

明久に声を掛けようとして止まってしまった。

そこには、明久の殴られた痕にやわらかい表情で手を当てている綾香の姿があつた。

二人とも、今まで見たことないような優しい顔をしている。

「大丈夫だった？ アツキー」

「うん、とっさに全身で“受け”だから、見た目ほどひどくはない

よ

明久の言葉に、綾香は小さくうなづいた。
その様子を見て、美波は我知らずにたさやかな己の胸に手をやる。
そこへ。

「美波ちゃんどうしたんですか？」

瑞希が声を掛けってきた。

「え？ 「つうん、何でもないのよ？」

「明久君と、綾香ちゃん……ですか？」

瑞希の言葉に、体が震える。が、意を決して小さく頷いた。

「……そうですか。けど、覚悟はしておいた方が良いですよ？」

そう言われて美波は瑞希の方を見る。瑞希は、困ったような笑顔を浮かべていた。

「私、あの二人とは十年ほど付き合いがあるんですよ。だから分かるんです。一人の絆が。それに割り込むのは、とても大変ですよ？」

そう語る瑞希の横顔を見て、それから二人を見やる美波。

「……けど、ウチは諦めたくない」

「……。なら、がんばって下さい」

そう言つと瑞希は一人の方へ足を進めた。

その後ろ姿を見送り掛け、強くかぶりを振ると、美波は自分の両頬を両の手のひらではたき、彼女を追うように足を踏み出した。

だいさんじゅうにもんなんだなあ。

その後、FクラスはBクラスを教室内に押し込むことに成功し、戦況は膠着する。

その間、綾香は回復試験を受けるために教室へ戻っていた。

「で、ちやぶ台が足りないと」

教室の状況を見て、綾香はため息を吐く。

先ほどまでの渡り廊下戦において点数を消費した面々が回復試験を受けているのだが、根本の設備破壊の影響が少なからず出てきたことになる。

「ほかのちやぶ台は使いものにならんし、時間的にも具合の良い奴を探してる暇はないからな。おまえの数学も必要なカードだから試験を受けさせないわけにもいかない。幸い視聴覚室が空いたそうだからそっちを確保してある。すぐに行って回復試験を受けてくれ」

「……ほんとにギリギリじゃん」

ノートで何かをチェックしながらそう言つてくる雄一に綾香は時計を見ながら息を吐く。

視聴覚室へ行つてすぐに試験を受けねばギリギリ十六時前だらう。綾香は小さく嘆息してから軽く走り出した。

それから時間が経ち、ギリギリ十六時前に回復試験を受け終わつた綾香は息を吐く。

このまま戦争は一時休戦になるだらうと思い、少し休んでから視聴覚室を出た。

「今日はどうしようかなあ」

しばらく両親はいないので、ふち一人暮らしみたいなものである。

明久の家に行つても良いし、一人暮らし気分を味わつても良い。

そんなことを考えながら階段を上つていく。

そして三階へたどり着き、廊下へ足を踏み出したとき、見計らつたように声が掛かった。

「よう夏田」

その声に立ち止まり、顔をしかめながらそちらへ振り向いた。

「……恭一」

四階へ続く階段の踊り場。そこに居たのはBクラス代表の根本恭二。

「……なんであなたがここに？　休戦中つて言つても大して時間も経つてないでしょ？」

時間は十六時を五分ほど回つた頃だ。休戦状態に入つてそうは経っていない。訝しげな顔になつて彼を見る綾香。

そんな彼女の様子に、根本は口の端を歪める。

「お前に話があるんだよ。上階まで付き合つてくれねーか？」

そう言いながら、アゴで上を示す。

それに対しても綾香は呆れと嫌悪を混ぜたような顔になる。

「……“また”あの話？　何度も断つて……」

「吉井つて観察処分のことだ」

拒否の態度を示して歩み去ろうときびすを返し掛けた綾香の顔に緊張が走り、足が止まる。そして再度彼を見やり蒼い視線を投げかけた。

「興味……あるだろ？」

勝ち誇った顔の根本をにらむ。が、何も言わずに階段に足をかける。

それを見た根本は得意げな顔で上階へと足を進めた。

「で、話つて？」

四階に着くなり綾香は問いただした。しかし根本の余裕は崩れない。

「おいおいせつかちだな。積もる話も無しかよ」

「じょーだん。あんたと語り合つ話なんてありやしないでしょ？」
にべもない綾香に根本は肩をすくめる。そして綾香を見下すようにしながら口を開いた。

「お前、あの観察処分者とイイ仲みたいだなあ

「？」

言われた意味が分からず首を傾げる綾香。

「まさか、あんなバカと同棲してるとは恐れ入つたぜ」

「恭一？ あんた何言つて……」

そこで根本は紙切れを一枚取り出して見せた。そこにプリンとされているものを見て綾香は口をつぐんだ。

「最近のコピー機の精度は悪があねえが、写真のコピーは微妙だな。だが見ればわかんだろ？」

少しピンボケしているが、そこに「写つて」と書かれているのは、マンションの玄関先。驚く少年の頬に、マンションから出てきた金髪の少女が口づけているシーンだ。

「これつて……」

その紙をひつたくつた綾香は一の句が繼げない。

「そこが観察処分者の自宅で、一人暮らししてるので調べがついてる」

そう、少年は明久。金髪の方は綾香だ。このシチューハーネーションには綾香も覚えがあつた。

ロクラスとの戦争が終わった次の日の朝、仲直りできたのがうれしかつた綾香は、出掛けにふざけて明久の頬にキスしたのだ。
「こんな不祥事が知れたら、大問題だ。しかも片や学園一の問題児。

片や学園でもよく田立ち、Aクラス入りも夢じやない才女だ。体面を気にするこの学園で問題にならない訳がねえよな」

綾香の手に力が入り、紙がクシャリと音を立てる。

「まあ、成績の良いお前は厳重注意で済むだろ？ が、観察処分者はどうなるかな？ 適当な理由付けて退学かもしれんな」

恭一の言葉に顔色が真っ青になる。

「違う！ 明久とあたしは従姉弟で……」

「へえそういうかい。だが、それは年頃の男女が同棲する理由になんねえだろ？」

「同棲じゃない！ あの口はたまたま泊まって……」

綾香は必死で否定しようとする。が、必死になればなるほど根本の思うつぱだつた。

「そんなの誰が信じる？ まあ良い。なんならこの事は黙っていてやつても良いぜ？」

恭一の言葉に綾香は田を細めながら彼をこじらむ。

「……条件は？」

「あの観察^{バカ}処分者と縁切つて、俺の女になれ、“綾香”^{モテ}」

言いながら根本は綾香に近づき、綾香の髪を一房手にして匂いを嗅ぐ。

その行為に生理的な嫌悪を感じて飛び退く綾香。

「恭一……あんた最低の人間ね……」

綾香のその言葉に、根本はいやらしげに笑みを浮かべながら肩をすくめた。

「返事は戦争後で構わんぜ？ ま、当然お前が戦争で“どんな活躍をするのか”も答える一環として見させて貰つけどな。ハハハハ！」

笑いながら階段を下りていく根本。

綾香はどつこつともない悔しさに、ただただ肩を震わせた。

クズの笑い声が聞こえる。

その話し声を耳にしたのは偶然。決して罪悪感から彼女の様子が気になつたわけではない。

聞こえてきたのは、最低の“脅迫”。自分の撮つた写真でここまでするクズ豚には殺意を覚える。

と、同時に、そんな奴の口車に乗つてしまつた自身の浅はかさにめまいがした。

下りてきたクズ豚に見つからぬよう身を潜め、通り過ぎるのを待ち、顔を出すと彼女が下りてきたところだつた。

その顔を見て、ショックを受けた。

いつも底抜けの笑顔で周囲を明るくする彼女の顔が、乾いた荒野を覆う曇天のようになつていた。

そして、その蒼い瞳から銀の滴が一筋流れ落ちたとき、燈色の髪の少女は死ぬほど後悔した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7557x/>

バカとテストと召喚獣～蒼い瞳の従姉～

2011年11月21日17時23分発行